

都市における場の形成

—市場内における縁台将棋の試み—

白濱 美南子

北九州市立大学文学部人間関係学科

要 旨

都市では道を歩けばたくさんの知らない人とすれ違う。そしてお互いのことを知らなくても生活に困らない。そのような都市で、知らない人同士が集う場というのはどうすればつくれるのであろうか。筆者は2013年6月～2014年1月現在に至るまで、北九州市旦過市場にある「大學堂」で縁台将棋大会を開催した。

大學堂は公共空間の特徴と、企業などの私的空間の両方の特徴をあわせ持つ、都市のエアポケットのような空間である。また、将棋は将棋指しに対して「行く・居る」という行為をアフォードし、将棋の盤と駒が置かれているという状況は将棋指しに対して「指す」という行為をアフォードする。さらに、将棋を指している光景は通行人に対して「立ち止まる」「盤面を覗く」という行為をアフォードする。大學堂という空間と将棋という日本古来の対面式競技があわさり、筆者も予想しない人の集まる場が形成された。

本論文は、公園での青空将棋や将棋クラブ、イベントなどの将棋を使った様々な場の要素を取り入れた縁台将棋大会運営の実践記録であり、空間や人が織りなす場の形成について考察した論文である。

目 次

はじめに	2-5-2 料金
第1章 人が集まる場とは	2-5-3 システム
1-1 大學堂とは	2-5-4 宣伝
1-2 将棋の特徴	2-5-5 開催時間や頻度
第2章 将棋を指す場	2-5-6 どのような人が集まっているか
2-1 青空将棋	第3章 縁台将棋大会
2-1-1 Is 公園	3-1 縁台将棋大会が始まった理由
2-1-2 T 公園	3-1-1 将棋の持つ可能性
2-1-3 O 公園	3-1-2 旦過市場の Aa
2-1-4 C 公園	3-2 縁台将棋大会内容
2-2 自治体などが運営する公共施設での将棋	3-2-1 準備したもの
2-3 将棋クラブ	3-2-2 料金
2-3-1 S 将棋クラブ	3-3-3 システム
2-3-2 Ki 将棋クラブ	3-3-4 宣伝
2-4 イベント	3-3-5 開催日と時間
2-4-1 北九州ハイビジョン将棋フェスティバル	3-3-6 どのような人が集まるか
2-4-2 天童桜まつり人間将棋	第4章 縁台将棋大会開催時の事例
2-5 将棋を指す場による特徴の違い	4-1 企画の検証
2-5-1 環境	

- 4-1-1 青空将棋らしくできたか
- 4-1-2 将棋センターらしくできたか
- 4-1-3 イベントらしくできたか
- 4-2 どのような人が関わっているか
- 4-2-1 キーパーソン Aa
- 事例 1 将棋処香車開店前の Aa
- 事例 2 将棋大会に参加する Aa
- 事例 3 将棋大会に協賛する Aa
- 事例 4 スポンサーを決める Aa
- 事例 5 差し入れをくれる Aa
- 事例 6 強豪と Aa
- 4-2-2 どのような人が参加したか
- 事例 7 Ba
- 事例 8 Bb
- 事例 9 Bc
- 事例 10 Bd
- 事例 11 Be
- 事例 12 Bf
- 事例 13 Ga
- 事例 14 筆者
- 4-2-3 参加者の行動
- 事例 15 机や椅子が足りない
- 事例 16 駒置きがない
- 事例 17 システムの変更
- 事例 18 名前を言わない
- 事例 19 差し入れをくれる参加者
- 4-2-4 参加費を払わずに将棋大会に参加する人
- 事例 20 Ca
- 事例 21 Cb
- 事例 22 Cc
- 4-2-5 観戦者
- 4-2-6 様子を見に来る人
- 事例 23 Ea
- 事例 24 団体
- 事例 25 Eb
- 事例 26 Eb と Fb
- 事例 27 Ee と Ef
- 事例 28 旅人
- 事例 29 市役所の人
- 第 5 章 縁台将棋大会開催時以外の事例
- 5-1 大學堂営業時の将棋
- 事例 30 市場の人の将棋
- 事例 31 通りすがりの人の将棋
- 事例 32 管理するものではない
- 事例 33 Ea が大學堂に来た
- 事例 34 旅人が大學堂に来た
- 5-2 大學堂閉店時の将棋
- 第 6 章 考察
- 6-1 キーパーソン Aa の存在
- 6-2 その場にいるひとりひとりの重要性
- 6-3 状況によって生じる場は異なる
- 6-4 その場にいる人が場をつくる
- 6-5 都市における場の形成
- おわりに
- 謝辞
- 参考文献

はじめに

街なかで将棋を指す人達が、北九州市旦過市場にある「大學堂」にいる。ここに来るのは将棋指しだけではない。通行人も足を止め盤面を覗く。なぜ人々はここに集まるのか。

人が集まる場にはどのようなものがあるか。職場や商業施設、自宅以外ではどこに集まるか。場の所有者は明確であり、人々は安易に場を使うことはできない。

人々が自由に集まり、関わり合う場が減少していることは、経済活動以外で人と接する機会も減少しているということである。また、とくに都市では不特定多数の人との接触を余儀なくされる。さらに人の入れ替わりも激しいため、特定の人との継続的な関係を築くことは難しくなる。

人との接触の場が限定され、不特定多数の流動する人々が住む都市で、人々が集まる場を構築するにはどうすればよいか。本論文は縁台将棋大会の企画を通じて、場がどのように形成されていくのかについて考察する。

縁台将棋大会の舞台となったのは「大學堂」という場である。大學堂は福岡県北九州市旦過市場内に位置する。この場は旦過市場と北九州市立大学の九州フィールドワーク研究会によって運営されている。そして筆者もその運営に携わっている。大學堂のコンセプトは「街の縁台」。人が大學堂に関わりたくなる様々な仕掛けを取り入れることで、一般の人達が大學堂や市場に集まり、その結果人とのつながりが生まれることを目的としている。

今回大學堂で実施したのは縁台将棋大会である。市場の中心にあり人とのつながりの場として設けられている大學堂。それに縁台将棋を組み合わせるとどのような場ができるのか。本論文は、どのように場が形成されていくのかについて考察する。

第1章 人が集まる場とは

1-1 大學堂とは

街なかで人々が集まる場として、公共空間や店などがある。本論文では公共空間を国や自治体を用意した、一般の人に開かれた空間であると定義する。例えば公園や広場、公民館のような空間である。広場や公園などの空間、さらに道路などには、ダンスや演劇などのアートの場にするという使い方もある。

そして店は、商売をする、商品やサービスを提供するための場である。個人商店やショッピングセンターなどである。

本将棋大会で使用した大學堂は、人と人とのつながりの場として設けられた場である。大學堂は福岡県北九州市旦過市場のなかに位置し、2013年7月7日に5周年を迎えた。北九州市HPによると、福岡県北九州市の推計人口は2014年1月1日現在、967,539人[北九州市HP 2014/1/15]であり、政令指定都市のひとつである。

旦過市場は小倉駅から徒歩10分、モノレールの旦過駅からは徒歩1分である。旦過市場HPによると、旦過市場の発生は大正2、3年ごろで、自然発生的な商店の集まりから広がりを見せている[旦過市場HP 2014/1/15]。旦過市場は生鮮食品の市場で多くの人々が商売を営んでおり、地域住民の日常の買い物場となっている。また、古くから続く市場であることから観光客も訪れ、市場は活気がある。大學堂は旦過市場の中心部に位置するため人通りも多く、市場の買い物客が気軽に立ち寄れる場となっている。大學堂の営業時間は10時～17時で、日曜、祝日、水曜(2013年9月から木曜定休を水曜定休に変更)が定休日である。

大學堂は旦過市場と北九州市立大学の九州フィールドワーク研究会の共同事業であり、筆者も2012年3月から大學堂の運営に携わっている。そのため大學堂は国や自治体を用意した場でも、企業が用意した

場でもない。大學堂について大學堂創設者の中心人物である竹川は、大學堂は市場の中にある大学であり、総合的な研究の拠点であると述べている[竹川 2009]。

大學堂は且過市場の昭和のような雰囲気合うように、古民家風に改築している。さらに大學堂は通路に面した扉は全て開放しており、店内を覗きやすい構造になっている。

また、且過市場では季節ごとの新鮮な魚介類や肉や野菜を手に入れることができる。そういった且過市場の特徴を活かした取り組みが、大學井である。大學井とは丼に白ご飯を盛り、その丼に市場の好きな食材をのせてもらいオリジナルの丼を作るというものである。大學井は、大學堂の営業日にはいつでもすることができ、新鮮な食材を好きなだけ丼にして味わうことができる。



オリジナルの丼を作ることができる大學井

さらに大學堂では、且過市場の写真を撮って展示するイベントを開催したことがある。且過市場には昭和の面影を残す古い風景が残っており、写真を撮りたがる写真家は多い。しかし市場の人は仕事であり、あまり勝手に写真を撮ることができるような雰囲気ではない。そこで考えられたのが「市場で好きなだけ写真を撮ることができる」イベントである。市場の人には事前にイベントのことを伝えており、イベントの日に参加者はいくらでも写真を撮ってよいこととなっている。このイベントは多くの写真家が集まり、賑わいを見せた。

このように大學堂では、且過市場の昭和のような風

景や、生鮮食品の市場といった特徴を生かした活動に取り組んでいる。本論文で紹介する将棋大会も、市場の雰囲気合うのではないかと、という理由から始まった。

また大學堂という場は、販売されている商品を購入しなければそこに居られない、イベントに参加しなければそこに居られないという場ではない。休憩したりおしゃべりをしに来たりするだけでも良く、そのような形で大學堂を利用する人も多い。大學堂は通路に面した扉を全て開放しており、誰にでも開かれた場である。大學堂は誰でも利用できるという公共空間の特徴と、商品などを販売しているという店の特徴の両方をあわせ持つ。今回の企画である縁台将棋は、市場や大學堂が持つそのような特徴を生かしたものである。この縁台将棋のイベントを通して、人はどのようにして場をつくりだしているのかを考察する。

1-2 将棋の特徴

人を集めるためには、人々がその場に「行きたい・居たい」と思う必要がある。命令・指示によりその場に集客するのではなく、人が自然とそこに行きたくなるということが望ましい。そのように人が自然とその行動をとりたくなるということを「アフォード(アフォーダンス)」と言う。アフォードについて本多は以下のように記述している。

ある事物のアフォーダンスとは、その事物がある環境の中でそれぞれの知覚者に対して持つ意味である。より具体的には、環境の中のものが知覚者に提供する行為の可能性である。たとえば椅子は人間に対して「座る」という行為をアフォードする。空気は人間に対して呼吸をアフォードするが、水はそうではない。(中略)環境の中に存在するものは、物体、物質、場、事象、他の動物、人工物のいかんによらず、すべてアフォーダンスを持つ。環境の中で活動している動物は、そ

の探索活動を通じて環境の中のアフォーダンスを知覚している。(中略)ある事物がある知覚者にとってどのような行為をアフォードするかは、その事物の持つ属性だけではなく、知覚者の属性やスキルにも依存する。すなわちアフォーダンスは、環境の中での事物と知覚者との「関係」として存在する。[本多 2005:p56-57]

アフォーダンスの観点から、将棋が人々に提供する行為の可能性を考える。

まず今日の社会では直接人と対面しなくても、生活に必要な食料や日用品、衣類や情報など、様々なものがインターネットを通して手に入れられる。それは遊びに関しても同様で、様々な遊びはネット化され、目の前に遊び相手がいなくてもネットを通じてどこかにいる誰かあるいはコンピューターと遊ぶことができる。ネット化されている遊びには将棋も含まれる。しかし実際に人と対面して対局を行うことで自分の棋力はどのくらいなのか、通用するものなのかを知りたい、試してみたい、自分の指し方について人の意見を聞いてみたいと思う将棋指しは多いだろう。そのため、将棋指しは将棋が指せる場へ足を運ぶ。日頃は行くことがなかった場でも、そこで将棋が指せるということが分かればその場へ行く。将棋が指されている場の存在は、将棋指しに対して「行く・居る」という行為をアフォードしているのである。

また、将棋の盤駒を路上に出し、近所の人や通行人が将棋を指す「縁台将棋」は昔から日本で行なわれていた。そのため路上に将棋盤や駒が出されている、路上で将棋を指している人がいるという光景に人々は見慣れている。そして将棋の盤と駒が置かれていると、将棋指しは将棋を指したくなる。将棋の盤と駒が置かれているという状況は、人間に対して「指す」という行為をアフォードするのである。さらに、縁台将棋は立ち止まって対局を覗いてよいという共通認識がある。普通は公衆の面前で何かをしている人がいても、それを覗き込むことはあまりしない。例えば、他者が扱って

るスマートフォンの画面を覗き込む、他者が読んでいる新聞を覗き込むという行為は日常生活でされないが、縁台将棋は覗くという行為が普通に行われる。対局を覗かれる側も覗く側も、その行為は普通のものであると認識している。将棋を指している光景は通行人に対して「立ち止まる」「盤面を覗く」という行為をアフォードし、そしてその行為は人々に受け入れられているのである。

将棋指しは将棋が指せる場に行き、盤駒が置かれているという状況を見た人は指したいと思う。そして対局を行っている光景を目にした人は覗きたいと思う。このように将棋は、人を集めるという特徴を持つ。さらに本縁台将棋大会は市場の中に位置する大學堂という場で行なうため、市場で働く人もホスト側の立場として関わっている。

第2章 将棋を指す場

本実験の目的は街なかに人を集めることである。その仕掛けとして将棋を用いているが、一般的に将棋を指す場として、公園などで集まって指す青空将棋、自治体などが運営する公共施設での将棋、将棋を指す場として営利目的で運営されている将棋クラブ、日本将棋連盟や地方の自治体などが行うイベントなどがあげられる。本章に示す将棋を指す場のデータは、2013年9月12日～同年9月18日のもので、イベントに関するデータは2013年3月23日～24日、4月20日～21日のものである。本章では将棋を指す場やイベントの特色をみていき、次章でこれらの場ごとの特色と大學堂の縁台将棋の特色の類似点、相違点を比較する。それではまず青空将棋からみていく。

2-1 青空将棋

本論文では、庭先や路地に縁台を出して行なう将棋を「縁台将棋」、公園や広場などで行なう将棋を「青空将棋」とする。筆者は大阪府大阪市のIs公園、T公

園、O公園、C公園、Ir公園、兵庫県神戸市M公園の6箇所の青空将棋を調査した。この6箇所の公園のうち、Is公園、T公園、O公園、C公園についてみていく。

1 Is公園

【立地】

Is公園は大阪府大阪市のB駅から徒歩10分ほどのところにある。公園には草野球などに使われる広い運動場や遊具がある。そのため公園では運動場でスポーツをする人、遊具で遊ぶ子ども、公園で休憩をしている人がいる。将棋を指すために人が集まっている場には、鉄棒や腹筋をするために作られたベンチがあり、そのベンチでは寝転がり腹筋をしているもいる。そのため、ベンチに腰掛け将棋を指す場合は、人がいないときに腰掛けなければならない。筆者は将棋を指すことしか考えず、周りを見ずにベンチに座ろうとしたので、腹筋をしている人とぶつかってしまった。

【環境】

将棋盤は6面広げられていた。将棋盤を置く机についてだが、将棋盤6面の内3面は公園のベンチを机代わりにして置かれており、残りの3面はビールケースやごみ箱のような空き箱を机にし、置かれていた。対局者は公園に備え付けられているベンチに座るか、自分達で持ち寄ったパイプ椅子や丸椅子、回転椅子に座って対局を行っていた。また、嫁入り道具の座布団が2枚用意されており、それらは椅子に敷かれていた。そして夜でも対局ができるようにライトが1つ、時計を使いたい将棋指しのために、対局用の時計も2つ用意されていた。さらに蚊取り線香やビニールシートも用意されていた。ビニールシートは木々にかけて雨よけにする。盤は既製品も使われていたが、ベニヤ板にマス目を書いた手作りの盤も使われていた。この手作りの盤はマスの上下にそれぞれ10cmほどの幅が設けられており、そこを持ち駒の置き場として使用していた。駒はプラスチック製のものから木製のものまで様々で

あったが、安価な駒が使用されていた。将棋を指すために用意されたこれらの備品は、この場に関わる人々が持ち寄って使っている。

【料金・システム・宣伝】

料金やシステムはない。また、この公園で将棋を指しているKaは、将棋を指しているこの場を記事にして宣伝してほしい、と色々な人に頼んだことがあるが、うまくいかなかったと言う。

【開催時間・頻度】

Kaが将棋を指しているこの場に初めてきたのが15年前であり、ここではそれ以前から将棋が指されている。Kaはこの場に毎日来て、暑さや寒さ、雨風に関係なく年中無休で将棋を指しているようだ。雨の日はビニールシートを木にかけて雨を避け、日が暮れて暗くなればライトを使う。しかし将棋は相手がいるので、Kaは来ていても相手がいなければ、一局も指せない日もある。また、相手がいて、しかもたくさん指してくれる人であれば、何十局も寝ずに指す日もある。

【参加者】

筆者が調査した日、Is公園では将棋を指す場が3箇所に分かれており、集まっている人数はそれぞれ大体10人、6人、4人のグループに分かれていた。将棋指しは基本的にそれぞれどこかの場に属しており、グループ内は顔見知りであった。

筆者は6人ほどの集まりの場所を特に調査した。この人達は他の集まりよりも、将棋を指すための備品をより多く揃えている。筆者は最初、将棋を指す場を旅してまわる旅人(本論文における「旅人」は、いずれもこの人物を示す)にこの場について教えてもらった。ここで将棋を指しているという噂を聞いた人がここに来ることもあれば、この場によく来ている人がここに来たことが無い人を連れてくることもある。

筆者が初めてこの場に来たとき旅人は、この場の中心人物であるKaに筆者を紹介した。Ka自身は15年前に知り合いにこの場のことを教えてもらい、以来ここに毎日来て将棋を指していると言う。この場に来る人

についてKaは、「印象的な人はたくさんいる。ここに来る人は独特な人ばかり。今現在ここにいる人も独特な人。そもそも、公園で将棋指そうなんて人には、変わった人しかいない」と語る。また、Kaは「道場やぶり歓迎」とも話す。「指しにくる人や観にくる人、色々な人がここに来たらいい」とKaは言う。Kaの棋力は高いが、本人は自分のことを弱く言う。Kaは毎日Is公園で対局者を待っている。この集まりの人達はKaのことを将棋が強いという面から一目置いており、同時に面白い人であるとも思っている。坂(阪)田三吉という有名な将棋指しが昔いたのだが、Kaのことを「坂(阪)田三吉の2代目」「Is公園の坂(阪)田三吉」という人もいる。

Kbは人のことを気にかけており、Kaや旅人をよく食事に連れて行く。筆者は最初、旅人にこの場を教してもらい一人でこの公園に来たのだが、その際もKbは初めて会う筆者を気にかけてくれた。最初、「あんた、中国のお菓子いるか?」といってお菓子をくれ、さらに筆者を手招きすると盤の上に駒を広げ、ある対局の棋譜を話しながら並べ始めた。Kbは頭の体操のために将棋を指しており、棋譜も一応メモを用意しているが、実際は覚えているようだ。Kbは最初筆者のことを不思議がっていたが、旅人の知り合いだということが分かったと、なぜここに来たのか納得していた。さらにその日旅人はその場にいなかったのだが、Kbは筆者のことを気にかけ、せっかく来たのだから旅人に会った方が良いと考え、旅人を電話で呼んでくれた。また、Kbは筆者に食事を2回も御馳走してくれた。Kbは将棋を指したり人の対局を観たりもするが、すぐそばにある鉄棒でトレーニングもしている。

観客についてだが、Kaは将棋を指しているのを見られるのは気になるという。競馬で気に入らない馬が横のゲートにいたらその馬が走りださないように、気に入らない人が横に来て観ていたら負ける、とKaは話す。観客が気にならないという人はおかしい、ともKaは言う。観客が横で咳をしていても、黙って観ていても、気が散る。しかしここは公園だから向こうへ行ってくれとは

言えないとKaは言う。さらにKaは、「大体、公園で将棋を指すということが間違い」と言う。しかしなぜ公園に来て将棋を指しているのかというと、年配の人が将棋を指せる公共施設はあるが少ない、将棋を指す場が無いからだそうだ。またKbは、「施設は規則がうるさい」と話していた。



Is公園の青空将棋

2 T公園

[立地]

T公園は、大阪府大阪市T駅につながる出入口の近くにあるため、駅の利用者が多く通る。公園近くの道路も交通量が多く、車の騒音が響いている。

[環境]

将棋盤は4面ほど広げられていた。公園に備え付けられているベンチや、自分達で持ち寄った椅子を利用して対局していた。椅子に将棋盤を置くときは、椅子の上に板を乗せてその上に将棋盤を乗せていた。将棋盤や駒は既製品が使われていた。

[料金・システム・宣伝]

料金やシステムはなく、宣伝もされていない。

[開催時間・頻度]

何十年前からここでは将棋が指されている。Kdは10年ほど前からここに来て将棋を指していると話す。また、Kgは20年前ぐらいからここに来て将棋を指していると言う。気温が暖かい日は集まって指しているが、暑いとき、寒いときはしていない。時間は、10時～暗くなる夕方まで指している。

[参加者]

筆者が調査した日、T公園では将棋を指す場が2箇所に分かれており、集まっている人の人数はそれぞれ大体15人、6~8人に分かれていた。前者の集まりに人が多いのは、そちらの集まりの方が駅につながる出入口に近く、通行人が多く通るためだと思われる。後者の集まりは駅につながる出入口からは少し遠い。ここには大体いつも6~7人来ているという。

前者の集まりには、その場の主のような人物がいる。主はしゃべりながら常に誰かと対局をしていた。主と将棋を指していたのはスーツ姿のビジネス鞆を下げている男性で、仕事の合間に指しているのではないと思われる。また、対局を観ていたある人は、「ここに集まっている人は皆我流で将棋を指している」というていた。そしてKdは、「ここだけでなく、色々なところで将棋を指しているため、様々なところのメンバーになっている」と言う。

後者の集まりの一人Keは、「主体となっている人は別にいない」と言っているが、Kfが自然と主のような立ち位置になっている。最初、Kfはまだここに来ていなかったのだが、Keは筆者と将棋を指してくれた。Kfが来ると、その集まりの人達はKfに筆者を紹介した。ここでは仲間内に入れてもらって将棋を指すとのことで、この集まりの人達は、Kfに筆者を紹介し、筆者を仲間に入れようとしてくれた。またKeは、「あちらの集まりとこちらの集まりは違う。こちらの集まりの方が強い人が多いと思う」と話す。

Kgはアルバイトをして生活しており、「あちらの集まりの方が新しい」と言う。Kgは気楽に将棋を指しており、将棋のことについて特に真剣に考えていないと言う。またKgは、将棋は強い人と指さないと強くならない、弱い人と指しても強くならない、と話す。

観客についてKgは「観客がいても気にならない、しかし対局相手が強いとき、観ている人に何か言われたら気になる」と話す。



多くの観戦者がいるT公園

3 O公園

[立地]

O公園は大阪府大阪市O公園駅のすぐ横に位置する。広大な公園で大阪城天守閣、庭園、梅林などがある。また、大阪城音楽堂、大阪城ホールでは、音楽コンサートも開催されている。さらに、弓道場、修道館などスポーツ関連施設もある。

[環境]

将棋盤は1面広げられていた。将棋盤は公園に元々備え付けられているベンチに置き、対局者もベンチに座って対局している。対局者は椅子の上にビニールでできた敷物を敷いて対局を行っていた。また、雨が降りだすと車庫前まで移動していた。車庫は閉まっているが、車庫の扉の前60cmくらいは、雨を避けることができる。この日に車庫から車が出てくることはないことが分かった上でそこに移動していた。そのときは将棋盤を地面に置き、対局者は新聞とビニールでできた敷物を敷いて対局を行っていた。将棋盤や駒は既製品が使われていた。

[料金・システム・宣伝]

料金やシステムはなく、宣伝もされていない。

[開催時間・頻度]

ここに来ているKhは、ここに来るのは週1回、日曜日だけだと話す。雨が降ったら来ないが、来た日は朝から晩まで20~30局指すと言う。

[参加者]

筆者が調査した日、O 公園では将棋が指されていた場は 1 箇所だけで、2 人きりで行なわれていた。

Kh は昔、D クラブという将棋クラブに通っていた。Kh は強いので D クラブに Kh が行くと、「Kh 四段来た」と言われ、皆 Kh と指したがらなかったと言う。そのため Kh は互角に戦える人を待たなければならなくなるが、待つのも大変だから行かなくなったと Kh は話す。そして今はずっと、O 公園に来て将棋を指していると言う。対局中は酎ハイを飲んでおり、これを飲むことで読みが良くなると言う。

Ki は 20～30 代の人で、ジョギングウェアを着ていた。Ki は Kh と仲が良く、筆者が Kh に「今後もここに来て将棋を指すつもりですか」と聞くと、Ki は「Kh はここに来て、僕に将棋を教えてくれんといかん」と話す。

観客はいなかったが、Kh は観客がいたとしても全然気にならない、と話す。

4 C 公園

〔立地〕

大阪府大阪市 T 駅から 2 キロほど離れたところに、S 山という人工の低い山がある。その山の周辺には C 公園という場が作られており、公園内はたくさんの植物が植えられ、整備されている。

〔環境〕

C 公園では公園の藤棚の場が将棋を指す場になっていた。将棋盤は 3 面広げられていた。自分達で持ち寄った長机に将棋盤を並べ、自分達で持ち寄った椅子に座って対局を行っていた。公園に元々備え付けられているベンチは物を置く場となっていた。雨風を避けるために藤棚の天井部分にビニールシートかけ、屋根のようにしている。またビニールシートは木にもくくりつけられており、カーテンのように使われていた。C 公園には自分達が用意したロッカーがあり、盗まれて困るものは入れていないが、散らかしたりなどのいたずらをされないように、鍵を掛けている。ラジカセ、ガスコンロ、やかん、コップなども用意されている。将棋盤

も駒も既製品であるが、将棋盤は足つきのもが使われており、盤の側面にはそれぞれこの将棋の集まりのグループ名、「竜王戦挑戦」「兵歩名人専用」「真剣勝負待無」などの言葉が書かれている。また、駒置きは手作りである。こういったビニールシートやコップなどの備品、盤駒や駒置きはこのグループの全員でお金を出しあって買ったり持ち寄ったり、作ったりしている。



ビニールシートでカーテンをつくっている C 公園

〔料金・システム・宣伝〕

C 公園の青空将棋の料金は月 1000 円で、そのお金で飲み物や備品を揃えており、収益はあげないように使いきっている。ここは「賭け将棋は禁止」「お酒を飲んでこの場へ来るのはいいが、飲みながら指すことは禁止(例外として、たまに夏の暑い日などに皆で相談してビールを飲みながら指すときもある)」というルールのもと行なっている。

元々 C 公園では、20 年前頃から公園内の様々な場で多くの人が将棋を指しており、藤棚全て埋め尽くして指していたこともあったが、2～3 年前にそれら将棋を指す人達をひとつに集めようという試みが始まった。その試みはそこを利用していた将棋指し達によるものであった。そうやってひとつにまとめることを嫌がる人は姿を現さなくなり、また、飲み物代や備品代として月 1000 円集めることを嫌がった人、仲間内にとけ込めない人も姿を現さなくなった。そうして出来たのがこの集まりである。

藤棚の壁には、「将棋愛好者募集 初心者歓迎年

齢は問いません アマチュア高段者による指導いたします」という張り紙があり、張り紙には、気になる人はこの公園のこの藤棚のところに来てください、といった内容が書かれている。これは宣伝というよりも趣味で作っている感じである。

〔開催時間・頻度〕

Kj はこの場について「年中無休。正月も盆も雨の日も台風の日（直撃は除く）もやっている」と話す。時間は10時～日が暮れる17時、18時まで指しているという場合がほとんどである。

〔参加者〕

この将棋の集まりには名前がつけられており、現在メンバーは23名である。年齢は、最年長は82～83歳、最年少はたまにはあるが小学生もいる。メンバー全員が一気に来ることはなく、午前と午後で自然と人が入れ替わる。午前中は4～6人、午後は10～14人の人が将棋を指しており、午後はそれに加えて休憩している人もいる。

また、将棋を指す場がひとつになる前から世話人など役割を持つ人は決まっている。本人もメンバーも、この人はこのような役割を持っているという共通認識がある。

Kk は会計係になっており、周りも「会計といえばこの人しかいない」と思っているそうだ。さらに将棋盤に「竜王戦挑戦」などの文字を書く、壁に張り紙をしているのもKkである。Kkは、「あの言葉にはこういった意味を込めている」というこだわりがあり、そういったことをするのが楽しいそうだ。

Kj は朝早く来てこのメンバーのために盤駒のセッティングをしたり、飲み物を用意したりする。そして全員が帰ったら片づけをする。「やっていることはお手伝いさんに近いが、自分ではボランティアだと思っていない。好きでやっている」とKjは話す。Kj自身は、将棋を指すことが目的でここに来ているわけではないとのことであった。「ここに来ている理由は分からないが、好きで来ていて楽しんでいる」とKjは話す。

またKjは「もう少し一生懸命勉強していれば良かった、自分の人生もこれで終わりかな、と考えるのは儚い。金持ちであればいいというわけではない。ここで将棋を指しているくらいが、一番楽しいのではないかと話す。

さらにKjは、老人センターなどが将棋を指す場を設けているが、そのように年配の人のために用意された空間は好きではないと言う。そこには若い人や将棋を指さない人が気軽に立ち寄ることができないためである。将棋道場なども特殊な人達の集まりのように思えると言う。それに対しこの集まりは、将棋を指す人に限定せず、買い物帰りや犬の散歩のついでの人が覗ける場となっている。将棋を指さずにコーヒーを飲みに来るだけでもよい。指さなくても覗いているだけでよく、覗いたら自然と指してみたいくなる。すると「私も仲間に入れてください」といつてくる。そうやって仲間に入ってくる人を待っている、とKjは話す。

また、この公園で将棋を指している人の中には、「大阪では暇を持て余している年配男性が多く、家でテレビを観ていても仕方ないし、奥さんには色々言われて家にも居づらい。子どもはお小遣いをもらうときだけやって来る。結局、年配男性は行くところが無い」と笑いながら話す人もいた。

2-2 自治体などが運営する公共施設での将棋

自治体などが用意した市民のための各施設には将棋を指すための場が設けられている。筆者は大阪府大阪市のあいりん労働福祉センターにて調査を行った。なお以下の文章の労働福祉センターは、あいりん労働福祉センターを指す。

2-2-1 あいりん労働福祉センター

〔立地〕

労働福祉センターは公益財団法人西成労働福祉センターが管理・運営している、地上4階、地下1階の建物である。この建物の中に囲碁・将棋を指すための

部屋が設けられている。労働福祉センターでは「将棋愛好者の集い」というイベントも行なわれている。

【環境】

建物の中であるため暑さや寒さ、雨風をしのぐことができる。将棋を指すために必要な机や椅子はセンターによって設置されている。これらは移動させることが出来ないように地面に固定されている。将棋盤も机の上に固定されている。駒はここで将棋を指す人達が持ち寄り、使っている。

【料金・システム・宣伝】

料金やシステムはない。ネットで検索すればこの部屋の情報が出てくるが、特に宣伝はされていない。2013年9月15日発行の「センターだより」という刊行物には、「将棋愛好者の集い」のイベントについては記載されているが、将棋を指すこの部屋のことについては書かれていなかった。

【開催時間・頻度】

この部屋では毎日将棋を行っている。時間は午前5時～午後4時20分までである。

【参加者】

部屋の中で将棋を指している場は特に分かれておらず、部屋では12人ほどの人が将棋を指し、観ていた。ここで将棋を指しているK1は、10年ほど前から公園かここに来て指していると言う。K1は近所に住んでいるため、この場のことを知っていたと言う。お金がないからここに来ていても話していた。

指している人も観客も、おそらくこのセンターの利用者が多いのではないかと考えられる。

2-3 将棋クラブ

本論文では将棋クラブを、営利目的で設けられた将棋を指すための場と定義する。その条件を満たしていれば将棋道場と呼ばれているものも将棋クラブを含む。筆者は大阪府大阪市のS将棋クラブ、T将棋センター、Ki将棋クラブ、Dクラブ、将棋クラブS、K将棋会館道場、兵庫県神戸市のK将棋センター、福岡県北

九州市のKo将棋センターの8箇所を調査した。本論文ではそれらのうちS将棋クラブとKi将棋クラブを紹介する。

2-3-1 S将棋クラブ

【立地】

大阪府大阪市浪速区、新世界の繁華街ジャンジャン横丁の中に位置する。S将棋クラブの1階の、通路に面した箇所はガラス張りとなっているので、店内に入らなくても通行人がガラス越しに盤面を覗くことができるようになっている。店名は将棋の格言、「三桂あって詰まぬことなし」からきている。

【環境】

冷暖房完備で喫煙可である。1階と2階がある。さらに将棋関係の本も自由に読めるようになっている。パンなどの軽食、飲み物、さらにライターやちり紙なども販売している。椅子や机、盤駒や駒台はたくさん揃えられている。壁には大盤と大駒、段級を示す名札が飾られている。名札は6段～10級までである。名札の位置はたまに変えており、昇級させることはあっても降級させることはないと言う。またS将棋クラブでは、10年ぶりくらいに来て「昇級されている」と喜ぶ人もいると言う。「大阪は労働者の街だから田舎に帰る人もいて、そういう人がたまに来て自分の名前の札があると喜ぶ」と運営者は話す。

【料金】

料金は1時間300円、2時間600円、3時間800円、4時間～1日1000円である。学生は2時間～1日600円である。

【システム】

席主のKm(運営者)が客に声をかけて対局相手を決めていた。なるべく棋力に差がないように配慮しているようだ。

【宣伝】

特に行っている様子はないが、報道関係者が取材に来ることもあると言う。

[開催時間・頻度]

S 将棋クラブは 60～70 年前から営業している。営業時間は 9 時～22 時である。

[参加者]

S 将棋クラブに来る客の数は昔に比べて減ったが、今でも土日は 100 人ほどが訪れる。

Km は、将棋クラブという商売はお客さんがお客さんと呼ぶ、と述べる。また、対局に負けても楽しかったという気持ちがなければお客さんは来ない。将棋教室のようなものは勉強にはなるが楽しめるのだろうか、と話していた。さらに、将棋教室というのは多いがここのように色々な人と指せる場は減ってきていると言う。ここに来るお客さんについて Km は、「強い人と対局したいという人もいれば、弱い人と対局をしたいという人もいる」と言う。

Kn は 40 年くらい前からここに来ている。将棋クラブに出入りしだしたのはここが初めてと言う。

Ko は、20 年くらい前からここに来ている。現在仕事はたまにしかしておらず、休みの日は毎日ここに来ているとのことである。将棋の対局について、勝つことにはこだわっていないと言う。楽しんで時間が潰せればいい、と Ko は話す。



ガラス越しに店内を覗くことができる S 将棋クラブ

2-3-2 Ki 将棋クラブ

[立地]

大阪府大阪市城東区、福見産業株式会社ビルの 2

階に位置する。元々は、同社ビルのオーナーが、趣味でこの将棋クラブをつくった。

[環境]

外にはのぼりが立てられている。室内は冷暖房やパソコンが完備されており、禁煙である。100 人ほどの客を収容できる。さらに将棋関係の本も自由に読めるようになっている。飲み物の他、カップ麺も販売している。椅子や机、盤駒や駒台はたくさん揃えられている。

[料金]

一般 1 日 1000 円、一か月定期 8000 円、女性・学生 1 日 500 円、一か月定期 4000 円、団体(部屋貸し) 500 円×人数である。滞在時間が短い場合は帰る際に 500 円券を渡す。1 か月定期は月極と違い随時購入できる。例えば、購入が 10 日なら翌月 9 日まで有効である。見学の人は席料がかからない。

[システム]

学生スタッフを中心に運営しており、色々なイベントも行なっている。例えば客に級位者の人が多ければ級位者だけのトーナメントも行なう。客はパソコンでネット将棋を指すこともできる。スタッフも客と対局する。

[宣伝]

新聞に広告を載せたことがある。ホームページも作っている。

[開催時間・頻度]

Ki 将棋クラブは 2012 年 4 月から営業している。営業時間は土日祝日が 10 時～23 時、平日は 12 時～23 時である。

[参加者]

筆者が調査した日は「土曜会」というイベントの場、研究会の場、子供向けの教室が開かれていた場の 3 つに分かれていた。状況によって使い分けているようだ。男女比は、男性が 9 割か 10 割で、女性は 0 に近い。そして 10 代、20 代は 1～2 割である。段位者と級位者の割合は、大体段位者が 2 割で級位者が 8 割である。

Kp は、以前は学生が多く一般の人が少なかったの で、一般の人を増やせるように取り組んでいると言う。

また、段位者は力があるためどこの将棋クラブにも行きやすいが、級位者の人は将棋クラブに行きづらい。級位者の人達にも来てもらいたいとKpは話す。

運営者のひとりのKqは、ここは儲からなくてもいいからつぶれない程度に残ってほしいと話す。

2-4 イベント

本節では日本将棋連盟が携わるイベントを紹介する。紹介するのは「北九州ハイビジョン将棋フェスティバル」と「天童桜まつり人間将棋」である。

2-4-1 北九州ハイビジョン将棋フェスティバル

[立地]

北九州ハイビジョン将棋フェスティバルは福岡県北九州市で開催される。前夜祭の会場はリーガロイヤルホテル小倉、翌日のイベント会場は北九州国際会議場であった。

[内容]

北九州将棋フェスティバルの前夜祭は、棋士と将棋ファンの交流のために開催された立食パーティーのようなものである。

翌日のイベントで筆者が観に行ったのは「指導対局」「永世名人対談」「記念対局」である。指導対局はプロ棋士・女流棋士が一般の人と将棋を指すというイベントである。将棋盤は何面も並べられ、一般の人は基本的に一面で一局しか指さないが、プロ棋士・女流棋士は何面もの盤で何局も同時進行で指していく。

永世名人対談は広いホールのステージでプロ棋士が対談するというものである。

記念対局はホールのステージで、プロ棋士が将棋を1局指す。別室で大盤解説がされ、その映像をホールにある大画面に映す。観客はホールの座席に座り、目の前のステージで行なわれている対局を観ながら別室で行なわれている大盤解説の映像、盤面のアップの映像をステージの上方にある大画面で観る。大盤解

説の解説者の声を聞くために、小型の機械が一人一人に渡され、観客はイヤホンをしてその解説を聞く。

[環境]

前夜祭…会場には机、たくさんの食事、飲み物が用意されていた。

指導対局…多くの盤駒、机、一般の人が座る椅子が用意されていた。

永世名人対談…ステージがセッティングされていた。

記念対局…この対局で使われる盤駒は立派なものであった。また、大盤解説用の盤駒、撮影・放送のための機材、別室の大盤解説を聞くための小型の機械が用意されていた。

[料金]

将棋フェスティバルの前夜祭は食事が用意されているため、参加費は大人 3000 円、子ども(中学生以下) 1000 円である。翌日のイベントはいずれも無料であった。

[システム]

イベントなので事前申し込みが必要なものもある。プログラムどおりに進む。

[宣伝]

ポスターやチラシ、インターネットなどである。

[開催時間・頻度]

2013年3月に21回目を迎えた。1回のイベントにつき開催期間は1日である。前日には前夜祭が行われている。2013年のイベントの、開催時間は以下の通りである。

前夜祭…18時～19時半(棋士紹介が20分、棋士と会話しながら食事をする時間が40分、抽選会が30分)

当日…13時半～17時

[参加者]

メインイベントである記念対局は定員500名であった。将棋関係者、将棋ファンだけでなく、将棋には詳

しくない地元の人も多いと思われる。

2-4-2 天童桜まつり人間将棋

[立地]

人間将棋は山形県天童市で開催される。イベント1日めは舞鶴山山頂広場で開催され、2日めは天候が悪かったため天童市市民文化会館で開催された。

[内容]

人間将棋イベントは、地面に書かれた大きな将棋盤のマス目に、甲冑を着た駒役の人間が立ち、プロ棋士や女流棋士はその盤面と人間駒で対局を行なう。それがメインのイベントである。そのメインイベント以外にも周りで色々と将棋関係のイベントを行なっている。

また天童は駒の産地であることから、天童の盤駒が販売されている。



人間将棋

[環境]

北九州の将棋フェスティバルと大きく違うところは、人間将棋は駒役の人、甲冑が必要であるということである。駒役は一般の人から募集される。

[料金・システム・宣伝]

人間将棋の観戦は無料である。

[システム]

イベントであるのでプログラムが事前に組み立てられ、それに従ってイベントが進む。

[宣伝]

ポスターやチラシ、インターネットなどである。

[開催時間・頻度]

人間将棋は毎年4月に開催されており、2013年4月

に58回目を迎えた。1回のイベントにつき開催期間は2日間である。2013年のイベントの開催時間は以下の通りである。

1日め…10時40分～夕方

2日め…10時20分～夕方

[参加者]

人間将棋イベントの際、棋士の「将棋知ってる人?」という観客への呼びかけに対し、手を挙げたのは会場の半分くらいだった。将棋には詳しくないが、地元で開催されるのであれば見に行こう、という人も多いようだ。イベントに来た人は5万人であった。

以上が青空将棋・将棋クラブ・イベントの場の特色である。次節ではこれらの場の特色を項目ごとに分けて比較する。

2-5 将棋を指す場による特色の違い

2-5-1 環境

青空将棋…屋外であるため天気の影響を直に受ける。

寒さや暑さは耐え、雨が降れば木々にビニールシートをかぶせる、また、屋根がある場に移動する。

公共施設…室内のため、青空将棋よりは快適である。

将棋クラブ…室内で、さらに冷暖房も完備されており、盤駒もたくさん揃えられている。そして飲み物や食べ物が販売されている。

イベント…屋外の場合もあれば屋内の場合もある。比較的自由に出入りできる。将棋関連のものが販売されている。

2-5-2 料金

青空将棋…C公園を除いて料金は無い。また、C公園は会費を月1000円集めているが、利益を出さないように使っている。

公共施設…料金は無い。

将棋クラブ…将棋クラブによって席料は異なるが、大

体成人男性は1日1000円～1200円、女性や学生は1日500円～800円である。また、滞在時間が短いときや遅い時間に来たときの料金は安くなる。さらに、月極会員や回数券などのサービスを取り入れている将棋道場もある。

イベント…イベントではイベント内容によって料金がかかるものとかからないものがある。だがメインイベントは無料であることが多い。

2-5-3 システム

青空将棋…システムはとくにない。対局相手もお互いに誘いあって決めている。

公共施設…システムはとくにない。対局相手もお互いに誘いあって決めている。

将棋クラブ…席主が客の棋力やどんな人と指したいかという希望を考慮し、客の対局相手を決める。客同士が誘いあって対局を行うときもある。

イベント…プログラム通りに進む。指導対局では一般の人がどのくらいの手合いで対局してほしいか決めることができる。

2-5-4 宣伝

青空将棋…Kaは人に宣伝してくれと頼み、Kkは壁に張り紙をしているが、しっかりした宣伝はしていない。

公共施設…イベントの宣伝は広報紙でしているが、将棋を指せる部屋の宣伝はされていない。

将棋クラブ…新聞に広告を載せる、ホームページやチラシを作るなど。

イベント…ポスターやチラシを広い範囲に配っている。宣伝に力を入れている。

2-5-5 開催時間・頻度

青空将棋…ほぼ毎日行われていた。大体10時～17

時、18時くらいまでであった。

公共施設…あいりん労働福祉センターでは毎日行われていた。5時～16時20分までであった。

将棋クラブ…筆者が調査した場では、休みがないか、あっても週一日程度であった。開店時間は早いクラブで9時、遅いクラブで13時であり、閉店時間は早いクラブで20時、遅いクラブで23時である。

イベント…北九州将棋フェスティバルや人間将棋イベントなどは毎年、年1回1日(前夜祭を除けば)～2日かけて開催されていた。

2-5-6 どのような人が集まっているか

青空将棋…自由に使える時間が多い年配男性が多かった。行くところが無い、お金が無いからここで将棋を指しているという意見もみられた。

公共施設…センターの利用者や、近くに住み、青空将棋にも行っている人であった。

将棋クラブ…毎日のように通っているという人もいればそうでない人もいる。級位者が初めて行くには行きづらいという印象もある。

イベント…将棋関係者や将棋ファンだけでなく、将棋には詳しくない地元の人もいる。

青空将棋では、人々が集まって自由に遊んでおり、公共施設での将棋を指す場合は、自治体が市民のために用意した場である。将棋クラブは将棋を用いて商売をしている場であり、イベントは将棋の普及のため場となっている。本将棋大会は、上記の場の特徴を少しずつ取り入れているが、目指すのは街なかに人が集まる場である。

第3章 縁台将棋大会

3-1 縁台将棋大会が始まった理由

3-1-1 将棋の持つ可能性

1章では将棋がどういう行為をアフォードするかについてみてきた。将棋が指されている場の存在は、将棋指しに対して「行く・居る」という行為をアフォードしており、将棋の盤と駒が置かれているという状況は、人間に対して「指す」という行為をアフォードする。将棋を指している光景は通行人に対して「立ち止まる」「盤面を覗く」という行為をアフォードし、そしてその行為は人々に受け入れられている。また、近所の人や通行人が将棋を指す「縁台将棋」は昔から日本で行われており、人々は見慣れている。

3-1-2 且過市場の Aa

福岡県北九州市且過市場にある「大學堂」の近くに、個人商店を営む Aa という人がいる。Aa は現在 68 歳で、昔大阪にいたことがあり、よく縁台将棋を指していたと言う。将棋がとても好きな人で、強い人とも弱い人とも、棋力に関係なく誘って指す。「将棋は勝っても負けてもいい」と言う。勝ち負けに関係なく、将棋をすることで心が通じる、と Aa は話す。Aa は昔から、且過市場の自分の店先に盤駒を広げ、商売をしながら道行く人と将棋を指していた。

大學堂には 1 セット将棋の盤駒があるのだが、これは Aa のものであり、筆者を含め、九州フィールドワーク研究会のメンバーはこの盤駒で遊んでいた。また筆者が 2013 年 4 月に天童に行ったとき、大學堂用に将棋の盤駒を購入した。この盤駒を大學堂の営業時間中に通路側に置いておくと、Aa をはじめとする市場の人や、通りすがりの人が将棋を指し始めた。筆者はこの盤駒に、詰め将棋や最近のプロの対局の棋譜を並べたが、それではあまり人が集まらなかった。実際に人が対局している方が人は集まり、盤面を覗き込み「次は私が」と言って対局を始めた。しかし、対局を行う人がおらず、詰め将棋を並べているだけのときでさえ Aa は来て、詰め将棋を解いていた。

且過市場では元々 Aa が縁台将棋を行っており、大學堂の通路側に将棋盤を置いたときも、Aa が先頭に

立って将棋を指していた。そうして将棋を指す人が集まり、このことがきっかけで縁台将棋大会を企画することになった。

3-2 縁台将棋大会内容

3-2-1 準備したもの

将棋を指すために必要な机や椅子は、大學堂に元々あるものを使った。将棋盤や駒は友人から借り、手作りの大盤を用意した。また、イベント性、話題性を持たせるために、筆者が天童で購入した将棋盤 2 面と、香月作と 3 代目山上作の将棋駒 2 セットを大会で使用し、さらに地域の人からの盤駒の寄付も呼びかけた。

将棋クラブを参考にして、大会参加者にはお茶とお菓子を用意した。お茶とお菓子があった方が嬉しいのではないかと思ったからである。お茶は暑い日は冷たい麦茶、寒い日は熱い麦茶である。お菓子は筆者がスーパーで選んで購入している。お菓子の費用は大会の参加費から出している。さらに名札掛けと名札も用意した。これも将棋クラブを参考にしたもので、将棋を指す場のような雰囲気が出るし、自分の名前の札があることは大会参加者にとって嬉しいのではないかと思ったためである。これらは筆者と九州フィールドワーク研究会のメンバーによる手作りである。木材や板を加工し、ステインで色をつけている。

3-2-2 料金

青空将棋では基本的に料金はかからないが、将棋クラブでは通常席料を払って将棋を指す。この将棋大会は青空将棋と将棋クラブの中間のようなものにしたと考えた。そのため無料ではないが、将棋クラブの席料に比べると安い 500 円という金額に設定した。なお、且過市場で働く人や、九州フィールドワーク研究会の人は、運営側であるので料金はかからない。

3-2-3 システム

青空将棋の、人の出入りが自由であるという特徴や、

対局に関する決まりが無いという特徴に着目し、本大会では参加者の途中入退場が可能、ということにした。対局相手も始めから決まっているわけではなく、大会参加者同士で誘ったり誘われたりしながら対局相手を決める。対局数も決めなかった。また、対局では持ち時間を気にせず指せるよう、時計は用意しなかった。青空将棋のように気軽に参加してもらうために、本将棋大会は時間を気にせず気が向いたときに好きな人と好きなだけ対局できる、自由度の高いものとした。

将棋クラブでは将棋クラブ名があり、代表を席主と呼ぶのが一般的である。そういった将棋クラブの特徴を反映して、本将棋大会では大会を行っている時間だけ「大學堂」は「将棋処香車(しょうぎどころきょうす)」という名前にした。香車は本来「きょうしゃ」と呼ぶが、「きょうす」と呼ばれることもある。本大会では「香車」と書いて「きょうす」と呼ぶことにした。そして企画者となっている筆者を席主とした。

また、イベント性を出すために、大会の上位者には景品を贈ることにした。景品があると参加者もやる気になり、盛り上がりをもたせるのではないかと考えた。そしてそれらの景品は市場の方に将棋大会のスポンサーになってもらい、店の商品を景品として提供してもらうこととなった。本将棋大会を大學堂だけで行うのではなく、市場全体に関わってもらえれば、イベント性は増すのではないかと考えたためである。将棋大会の日は「且過杯」という名で大会を行うが、大会の景品はスポンサーとなっている市場の店からの提供であるため、「〇〇(店の名前)杯」と、店名を冠にして大会を行うこともあった。

本大会の上位者はポイント制で決めており、対局者は対局に勝ったら2ポイント、負けても1ポイントが付与される。そしてその月の大会の、合計ポイントが多い人が上位者となる。ポイントは翌月には再び0に戻る。対局に負けてもポイントが入るため、棋力が低い人でも上位者になれる可能性があり、将棋大会に参加する楽しみのひとつとなるのではないかと考えた。

3-2-4 宣伝

宣伝方法についてだが、ポスターを作成して本大学に掲示、さらにチラシも作成して市民センターに配布した。そして報道関係者へのプレスリリースも行った。

3-2-5 開催日と時間

大会は2013年6月10日～2014年1月10日まで行なった(本論文は2014年1月16日に提出したものであり、2014年1月10日以降も縁台将棋大会を継続していきたいと考えている。さらに、本論文で扱うデータは2013年6月10日～同年11月30日までのものである)。大会は毎月3回、10日20日30日に行う。その日は大學堂が定休日でも、大会の時間は開ける。大会の時間は14時から17時までの3時間である。

3-2-6 どのような人が集まるか

大學堂は20人も入れれば満員になってしまう。参加者は1回の大会につき3～10人くらいではないか、あるいは誰も来ないかもしれないと筆者は予想していた。また、将棋指しには男性が多いため、本将棋大会の参加者も男性が多いと考えられた。将棋指しの年齢層は小学校低学年～年配の方まで様々である。しかし本将棋大会は昼～夕方にかけて開催し、平日のときもあれば土日のときもあるので、学校に通っている子どもや働き盛りの大人は参加しにくい。そのため参加者は、仕事のスケジュールに少し余裕のある大人か退職した大人が多いと考えられる。本将棋大会が話題になれば、将棋クラブを運営している人や将棋ファンも、少し様子を見に来るかもしれない。

青空将棋では人々が立ち止まり覗きこむことができるが、将棋クラブでは中に入らないと対局を覗くことができない。だが大阪のS将棋クラブは、繁華街にあり、通行人がガラス越しに対局を見ているという青空将棋のような特徴があった。大學堂は且過市場の中にあるという特徴から、市場で買い物をするお客さんが覗き

込み、観客になるのではないかと思われる。また、大學堂には1階と2階があり、1階の通路に面した扉は全て開放しており、中を覗き込みやすくなっている。本将棋大会は青空将棋のような「観られるなかで指す将棋」にするため、1階で行なうことにした。そうすることで、その将棋は対局者達のものだけではなく、観客のものにもなる。指している本人達は真剣に将棋を楽しみ、観客が楽しむかなど気にしてはいないだろうが、観客にとっては将棋を指している人達はある種のパフォーマンスである。そこに何もなければ立ち止まらなかった、将棋を指しているから立ち止まった。足を止め、目を凝らして見たいものがあった。この点からも、将棋を人に観られる所で指すということは「見せ物」になっているといえる。見せ物にすることで、観客もその場、その状況を共有することができる。さらに、観客は対局の最初から最後まで見なければならないということはないため、途中から見て、途中で抜けることができる。その場に入りやすく、抜けやすい。そのような特徴が「観られる」将棋にはある。そのため本将棋大会は「観やすい」大会にした。

第4章 縁台将棋大会開催時の事例

4-1 企画の検証

本将棋大会では、青空将棋や将棋クラブ、イベントの特徴を少しずつ取り入れ企画した。こういった企画の内容それぞれについて検証していく。

1 青空将棋らしくできたか

本将棋大会は時間を気にせず気が向いたときに好きな人と好きなだけ対局できるようにした。そのためずっと将棋を指している人もいれば、途中で休憩を取り、たばこを吸いに行く人もいた。また、対局したい相手が他の人と対局中の場合、対局が終わるのを待っている人もいた。

本将棋大会の魅力についてある情報誌の人が Bc に取材した際、Bc は魅力の1つに時間の拘束が無い

ので参加しやすいということを挙げていた(11月20日)。

さらに、Bf と Bg は仲が良く、お互いがお互いを誘いあって指している。どちらかが先に将棋大会に来ると、もうひとりはまだ来ていないのかと筆者に尋ねてくる。

2 将棋センターらしくできたか

本将棋大会では、将棋を指している時間だけ「大學堂」を「将棋処香車」という名前にした。将棋クラブには普通クラブ名があるため、それをもとに作ったのだがこれはあまり意味がなかった。本将棋大会について一般の人に説明する時は、「大學堂で将棋大会をしている」と話す方が伝わりやすかった。同じ場に2つの名前があるというのは少し紛らわしかった。また、「将棋処香車」は新しく作った名前であるのに対し、「大學堂」は5年ほど前からある名前のため、「大學堂で将棋大会をしている」と言う方が人々に理解してもらいやすかった。

本将棋大会は、将棋クラブを参考にしてお菓子やお茶を用意した。お菓子についてだが、将棋大会の参加者は思ったよりお菓子を食べない。しかし「今日はお茶菓子が豪華だね」と言われることもあるので、一応参加者はお菓子を見ている。個包装されているピーナッツなどのつまみは不人気で、クッキーやチョコレートなどのお菓子は人気であった。また、スナック菓子はしばらく置いておくと湿気でしまい、チョコレートは暑いと溶けてしまった。さらに、寒くなると大學堂では安納芋の焼き芋を販売しているのだが、将棋大会中にこの焼き芋を買って食べる人もいた。そして、お茶は結構飲まれていた。水筒を持ってくる、市場の飲食店で買ったジュースを飲む、という参加者もいた。将棋大会の開始時間から終了時間まで、飲まず食わずでひたすら指し続けている人も多く見られた。

名札も将棋クラブの設備をもとにしたものである。名札について Bf は、「白濱さん、札ありがとうございます」と言って

くれた(6月30日)。また、名札を見て「〇〇さん来たんや」「これ上司や」などと人々は口々に言っていた。名札は参加者にとって嬉しいのではないかと思っていたが、思っていたほど反応は無く、顕著といえるほどの効果はなかった。

手作りの大盤と駒についてだが、これは飾っているだけでほとんど使うことはなかった。縁台将棋大会では特に有効な使い道がなかったのである。しかし8月上旬、市民センターの人が8月後半に、筆者の手作り大盤を借りたいといってきた。大盤を借りて、市民センターの「入門『子ども将棋講座』」という企画で使用したいとのことであった。筆者は大盤を貸すことにした。また、市民センターのこの企画に興味があったので筆者も遊びに行った。筆者は遊びに行ったつもりだったが、先生のような立場で参加することとなった。

3 イベントらしくできたか

将棋大会の日程や時間の設定は良かったのであろうか。本将棋大会は毎月3回、10日20日30日に行なった。大会の時間は14時から17時までの3時間である。日付で設定したのは、参加者が開催日を覚えやすいのではないかと、また曜日で決めると参加者が固定されてしまうのではないかと思ったからである。実際は、開催日が土日などと重なると、学校や仕事が休みの人が参加してくれた。また、将棋大会の風景を描きに来た絵描きが、朝から将棋大会を行っていると思い、10時に来てしまったが将棋大会の時間まで待っていてくれた。将棋大会参加者で開催時間を知らずに早めに来てしまった人もいたが、そのときは日頃出している将棋盤と駒で筆者と対局を行った。基本的に開催されていないときに、開催されていると思って来る参加者はあまりいなかった。また、将棋大会は昼食後の時間帯である14時～17時に開催しているので、大學丼を食べにくるお客さんともあまり重複しなかった。

イベント感を出すため景品を用意したが、これはどうだったのか。筆者は月ごとに将棋大会のポスターを作

って、ポスターにはその月のスポンサーや景品の情報を記載している。ポスターは大學堂の、通りに面した場に貼っている。立ち止まってそれを見ていく人、それが何であるかを聞いてくる人もいた。また、そのポスターを見て、将棋大会に参加はしないが、スポンサーになっている店で買い物をしてくれる人もいた。

毎月30日の将棋大会後にその月の上位者を発表し、景品を贈った。景品を贈ると参加者は喜んでくれるし、大会も盛り上がった。しかし参加者は景品のために参加しているというよりは、将棋そのものを楽しむために参加していた。景品をもらった人達はよく、「将棋を指して楽しませてもらっているのに、景品までいただいてありがとうございます」といったことを述べる。さらに、景品となった食べ物の感想を伝えてくれる参加者もいる。また、上位者は3日間の総ポイント数で決めているため、まれに1日だけの参加でランクインする人もいるが、ほとんどの場合たくさん将棋大会に参加したくさん指した人がランクインしていた。対局の勝ち負けだけで決まるわけではないため、自分の名前が上位者として呼ばれることに驚く人も少なくなかった。

本将棋大会では、青空将棋のような自由さを取り入れ、道場にあるようなお茶やお菓子を用意し、イベントらしさをだすため景品の用意をした。しかし、いくら自由に将棋を指せる場であっても、それだけで人が来るわけではない。また、お菓子やお茶、名札は無いよりはあった方がいい、くらいのもので、それ単体ではあまり意味があるものでもなかった。さらに参加者は、景品がもらえるから参加しているわけでもない。このように、準備されたものたちが、将棋大会の場の形成に果たす役割は限られたものであった。本将棋大会が成り立っていた理由は別のところにある。そして筆者は、運営者のような気持ちで将棋大会に関わっていこうと思っていたのだが、本将棋大会は本当に筆者が運営できていたのか。本将棋大会に関わっている人達について、どのようなことが起こったのかについての事例をみ

ていくことで、この場が成り立っている理由について考えていきたい。

4-2 どのような人が関わっているか

本将棋大会にはどのような人が関わっているのか。本将棋大会に登場する人達を、A 市場の人、B 縁台将棋大会参加者、C 参加料を払わずに将棋大会に参加する人、D 観戦者、E 将棋関係者、強豪、F Ko 将棋センター関係者、G 報道関係者、H 旅人、I 市の職員、J 九州フィールドワーク研究会(大學堂運営者)にグループ分けし(2 つ以上のグループに属する人は、どれか 1 つのグループに当てはめている)、アルファベット 2 文字で示している。最初のアルファベットは、その人がどのグループに位置するかを示している。それでは本将棋大会に関わっている人達について、それぞれみていく。

4-2-1 キーパーソン Aa

Aa は本将棋大会に深く関わっている。それは市場の人と縁台将棋大会の関係を示した表からも分かる(表 1)。

表 1 市場の人と縁台将棋大会の関係

	スポンサー			非スポンサー
参加者	Aa			Ab、Ac
非参加者	Aa の友達	市場学会の人	直談判	その他の市場の人 (Ad を含む)
	Ae、Af、	Ag、Ah、 Ai、 Aj、 Ak、 Al、Am	An	

自身が将棋を指しながらもスポンサーになるといった人物は、Aa ひとりである。Aa の将棋大会の関わりは

それだけではない。Aa は誰よりも将棋大会の開催を喜び、盛り上げていっている。そのことがよく分かる事例を紹介する。

事例 1 将棋処香車開店前の Aa

大學堂で本将棋大会のチラシに使うための写真を撮影した。対局している風景を撮るためには、2 人の人がいなければならない。筆者 1 人では対局ができない。そのようなとき Aa は、筆者と対局を行ってくれた。Aa にはこのときまだ、これから将棋大会を始めるという話をしていなかった。そのためなぜ写真を撮っているのか知らなかったと思うのだが、写真を撮っていることを気にせず、対局を行ってくれた(6 月 4 日)。

筆者は本将棋大会に関する取材を受けた。このときも写真を撮るため対局相手がいなければならなかったのだが、筆者が「将棋指そう」と Aa に言うと、Aa は快く指してくれた(6 月 5 日)。この日に限らず Aa は、誘ったときはほぼ必ず指してくれる。

且過市場で将棋大会をする、将棋を指しに人が集まる、ということを知った Aa は「ほんまにありがとう」「ほんとにわしはうれしいんや」「昨日は嬉しくて夜も眠れんやっ」と、非常に喜んでた。筆者は将棋大会がどうなるか不安であったが、将棋大会を行うことでこんなにも喜んでくれる人がいることは、とても励みになった。しかも Aa は、自身が将棋大会に人を呼んで盛り上げると言う。参加者としてではなくホスト側として、Aa は関わるとのことだった(6 月 9 日)。

事例 2 将棋大会に参加する Aa

将棋大会にもう少し参加者がいてほしいと思い、筆者は仕事上の Aa を呼び、筆者が店番をするから将棋を指さないかと誘った。Aa はそれを快く引き受け、筆者と店番を交代してくれた。筆者は Aa が茹でていた筍の、茹で時間とガスの止め方、そしてお釣りの場、商品を入れる袋の場を教わり、店番を交代した。そして Aa と Ga の対局が始まった(6 月 10 日)。

Aa は将棋大会中、自身が商売しているため、対局中に店と将棋処香車を行き来するのが相手に悪いから参加できない、とよく言うが、そう言いつつ頻繁に将棋大会に参加してくれる。また、友達を将棋大会に呼んでくれたり、将棋大会中通りすがりの人に指さないかと誘ってくれたりする。Aa は積極的に参加者を集めている。



本将棋大会に参加する Aa

事例 3 将棋大会に協賛する Aa

6 月の将棋大会の 1 位の景品として、大玉すいかを提供してくれた(6 月 30 日)。

7 月は「7 月は a 杯や!」という Aa の言葉がきっかけで、Aa の店の名前を冠にした「a 杯」という将棋大会を行った。1 位～3 位までの景品の提供を Aa と約束していたが、Aa は当日 1 位の景品しか用意していなかった。そのため筆者が困っていると、Aa は少し考えて、すぐさま 2 位と 3 位の景品を用意してくれた。筆者はお礼をいって景品を受け取りに行った(7 月 30 日)。

事例 4 スポンサーを決める Aa

本将棋大会では市場の人に将棋大会のスポンサーになってもらい、店の商品を景品として提供してもらうことになった。そしてスポンサーは、月ごとに変えることとなった。筆者は当初、「市場学会」という名前の、九州フィールドワーク研究会と市場の人達との、月に 1 回行なわれる会議の場でスポンサーを決めていこうと考

えていた(Aa、Ab、Ac、Ae、Af、An はこの会議に参加していないので将棋大会の詳しい事情は知らない)。

しかし実際には、Aa の呼びかけでスポンサーが決まることが多かった。Aa が自身の親しい市場の人に、スポンサーにならないかと呼びかけてスポンサーが決まっていたのである。

7 月最後の将棋大会の日、8 月の将棋大会のスポンサーは Ag と決まっていたが、9 月以降は決まっていなかった。筆者は 8 月の中旬頃 9 月のスポンサーを決める予定であった。しかし筆者の知らない間に Aa が Ae にスポンサーになってもらえないかという話をしておいでしてくれていた。筆者は予期せぬ話で驚いた。Aa と一緒に Ae の店に行き、話をしたのだが、Ae は快くスポンサーを引き受けてくれた(7 月 30 日)。

10 月のスポンサーも、Aa が Af に頼んでいてくれた。

11 月のスポンサーを考えているとき、An の店の商品は景品でもらったら嬉しいのではないかという九州フィールドワーク研究会のメンバーの意見を聞いて、筆者は An の店に行って相談した。An は 2、3 日考えた後、スポンサーを引き受けてくれることとなった。その後に知ったのだが、実は Aa は An に、「An の店は安売りをする日、いつも行列が出来て、行列が大學堂の前を塞いで大學堂に迷惑をかけている。大學堂は何も An の店に迷惑をかけていない。将棋大会のスポンサーになっちゃらんか」と言っていたそうである。An が将棋大会のスポンサーを引き受けてくれたのは、そういったことがあったからという可能性がある。

事例 5 差し入れをくれる Aa

将棋大会が開催される以前から、Aa は大學堂に頻繁に差し入れをしてきていた。ここではそれらの差し入れのなかでもとくに、将棋大会に関係すると考えられるものを挙げる。

Aa は、将棋大会が開催されると知り、とても喜んで、「前祝いや!」といって、この日 Aa は大學堂にすい

かを差し入れしてくれた(6月7日)。

将棋大会が開催される前、最後の大學堂営業日、Aaはすいかを差し入れしてくれた(6月8日)。

「今日は将棋大会やから、これ飲んで頑張れ!」と言って、Aaは昼頃に栄養ドリンクを差し入れしてくれた(10月10日)。

この日筆者は将棋大会でAaと対局し、勝った。そして将棋大会後Aaは、「これ負けたけん」と言って寿司9つとカップ麺をくれた。筆者と対局して負けたから、くれるとのことだった(11月20日)。

事例6 強豪とAa

Aaは人のことをよく見ている。そして将棋を指す人のこともよく見ている。Aaは将棋大会に参加する強豪を、どう見ているのかについて記述する。

将棋大会終了後、終始AaはFaの話をしていた。「あの男の人、黒い服のあの人が強いなーと思ったんやけどね、わしが最後金と銀で詰めた」という。実際はFaが勝ったはずなので、記憶違いなのではないかと思われる(6月10日)。

後日、Ko将棋センターに行ってFaにそのことを確認すると、やはりFaが勝っているようである。しかしFaは、「そりゃあ教を請いに且過行かんといかんなー」と笑っていた。その場においてそれを聞いていたFbも、「おもしろい八百屋やね」と笑っていた(6月15日)。

将棋大会後、AaはFbの話をし始めた。この日AaはFbの対局をずっと見ていたのである。Aaは、「わたしは黄色いシャツの人をずーっと見よった。5~6局見よったけん手が分かった。角、飛車を交換させて相手の桂馬の後ろ(桂馬の横とも言っていた)に打つんや」と終始言っていた。桂馬の後ろや横というのは、どこを指しているのか筆者は分からなかったの、盤に駒を並べながら聞いた(6月20日)。

Aaは将棋大会開始前から、自身が将棋大会を盛り上げようと考えていた。そして将棋大会が始まってから

というもの、参加者が少なければ自ら参加者となり大会を盛り上げ、人を呼び、将棋大会にもすすんで協賛する。スポンサーを決めるのも、筆者がAaに頼んだわけではなく、Aaが「スポンサーを決めなければならないのではないか」と判断し、周囲の人に協力を仰いでくれている。筆者にもたくさん差し入れをくれ、応援してくれている。また、Aaは人のことをよく見ており、将棋大会参加者のこともよく見ている。Aaはどのような人とも関わろうとする。Aaという人物がいなければ、本将棋大会はここまで盛り上がりを見せていない。Aaというキーパーソンがいたからこそ、将棋大会は活気づいたのだ。

本将棋大会の企画者は筆者であり、筆者自らが取り組みを行ったつもりになっていたが、筆者がしたのは備品を揃えることや簡単な決まりを作るくらいで、些細なことであった。筆者は将棋大会の参加者のひとりというだけである。将棋大会の開催について一番喜んでるのは、筆者ではなくAaなのである。筆者は自ら景品を提供していないし、参加しないかと呼びかけることも、あまりできていない。本当のキーパーソンはAaなのである。

また、Aaがなぜこんなに将棋大会について考えてくれているのかだが、やはり根本にあるものは、「将棋が好き」という想いである。Aaは昔から縁台将棋をやっており、現在でもこの且過市場で縁台将棋をやっている。そんな大好きな将棋の、大会をすれば、将棋指しが集まるし、自分もここで色々な人と将棋を楽しむことができる。そのことが非常に嬉しいのであろう。将棋大会はAaによって支えられており、またAaも、将棋大会があるからこそさらに将棋を楽しむことができる。そのため、Aaと将棋大会は持ちつ持たれつの関係であるといえる。Aaが将棋大会を支え続けているのは、そういった理由がある。

4-2-2 どのような人が参加したのか

次に、将棋大会の参加者についてみていく。どのよ

うな人達がここで将棋を指しているのだろうか。そしてここに参加する人達は、なぜここに来て、どのようなことを求めているのか。2013年6月～同年11月までの将棋大会の累計参加人数は、242人である。男女比は男238人:女4人、年齢層は60代、70代が多い(表2)。

将棋大会の参加者は男性が多く、そのなかでも年配の人が多く。なお、このデータは大会参加費未納者、大会運営者、市場の人は除いている。そして1人が複数回参加している場合、それぞれ別個にカウントしている。それでは将棋大会にはどのような人が参加しているのか、参加者達についてみていく。

表2 将棋大会参加者の年齢層

10歳未満	3人	40～49歳	37人	80～90歳	22人
10～19歳	15人	50～59歳	15人	不明	49人
20～29歳	1人	60～69歳	42人		
30～39歳	17人	70～79歳	41人		

事例7 Ba

Baは5歳(2013年6月現在)であり、本将棋大会の最年少の参加者である。Baはいつもここにご笑っている。Baの家族によると、家族に将棋を指す人はいないそうで、気付いたときにはBaはなぜか将棋の本やインターネットで勉強していたと言う。本屋に連れて行くといつものまにか将棋の本を買い物がごにいれているそうだ。

Baは将棋大会に来ると、Bdと筆者の対局を見ながら「これ穴熊やん」と笑いながら言っていた。また、その対局で使っていた駒の書体は簡略化されたものであったが、Baは正しく読み上げていっていた。対局中筆者がBaにアドバイスを請うたが、特にアドバイスはもらえなかった。その後Baの前に対局相手が来て、対局

が始まったが、Baは1回くらいしか駒を動かしてくれず、対局は中断せざるを得なかった。Baは駒の動かし方は知っているものの、実物の駒と盤を見るのはこのときが初めてだったそうである(6月20日)。

Baが久しぶりに将棋大会に来た。Baの保護者が、「ちょっと指せる人はいますか?」と言う。前回の様子から、指せないのではないかと、筆者やJaは思った。そしてJaとBaは対局することになった。対局では、Baは駒を動かせるようになっていた。「棒銀戦法だよ」などとBaは言い、BaはJaに勝った(8月10日)。

事例8 Bb

Bbは40代で、且過市場から少し離れたところでパン屋をしている。Bbが持つパンの情報量やこだわりはとでもすごいとJbはいう。またJbは、パンを作っているときのBpとここで将棋を指しているときのBpは全然違うと言う。ここで将棋を指しているときの方のBpは、楽しみにきている、遊びにきている、という感じだと言う。

BbはNHKの将棋番組を見たり、本屋で将棋の本を見たり、新聞の将棋に関するページを見ているようだ。Bbはかつてあった将棋クラブ、K会に通っていた人であり、Ko将棋センターで見かけるときもある。Bbは将棋大会に早めに来ることが多く、大会中はあまり休憩をとらずに指し続けている。

事例9 Bc

Bcも40代で、将棋が強く、将棋関係のイベントもよく見に行っている。将棋の本もよく読んでいるらしい。筆者はBcに将棋の本を借りている。

Bcは筆者と初めて対局を行なった際、筆者の中飛車に対し、Bcは三間飛車であった。対局後Bcは、筆者に将棋の攻めや守りに関するアドバイスをくれた(6月20日)。

大会中はよく人の対局を観戦していたり、どこかにたばこを吸いに行ったりしている。本将棋大会の魅力についてBcは、「ふらりと来て、時間を気にせず将棋をさ

せる。何度も参加して、お互い棋力が分かりあっている人もいれば、初めて指す人もいて、お互いのことが全く分からない人とも指せる」と言っていた(11月20日)。

事例 10 Bd

Bd は 60 代で、3 年ほど前から、「T 囲碁将棋クラブ」というところで将棋を指しているようだ。しかしそこはもうすぐ閉店するので困ると話していた。また、会社の昼休みに会社の人と将棋を指すこともあると言う(7月30日)。本将棋大会も、無くなったら困ると言っている。

Bd は筆者との対局で、「適当に指してみよう」と言って、穴熊を作った。筆者が劣勢であり、「やばい」とずっと言っているときも、「やばくない」と Bd は返してくれていた。周りの観客も、「やりよったら強くなるよ」と励ましてくれた。筆者が少しだけ良い手を指すと、「それは困った」と Bd は言っていた(6月20日)。

この日はある刊行物を発行している会社の Gb が、刊行物に掲載している将棋大会の様子を会社に報告するために取材に来ていた。そして Gb が対局中の Bd にインタビューしようとする、Bd は「今それどころじゃないんよ」と真剣に盤面を見つめながら優しく返していた(11月20日)。

事例 11 Be

Be は日頃、NHK の将棋番組は見ているが、指してはないと言う(7月30日)。

Be と筆者の対局の終盤、筆者はもう詰まされていて投了してよい局面だったのだが、何か逃げ道があるのではないかと思ひななか投了しないでいた。それを横で見ていた Bc は「こういうときは負けましたっていうんですよ」と笑いながら言い、それに対し Be は「これで(私が)負けるとしたら倒れるか何かですね」と笑って返した。筆者はしばらく考えたのち「負けました」と言って頭を下げた。Be も深く頭を下げていた(7月30日)。

事例 12 Bf

本将棋大会の一番の常連は Bf である。将棋大会は 6 月～11 月までに 18 回開催されているが、Bf はこのうち 17 回参加している。

Bf が将棋大会に初めて参加した日のことである。Bf は、Ja との対局が終わっていたので筆者が対局結果を聞きに行った。すると、「強い人とやってないから」「まだ全然指してない」と言う。Ja は対局数に入れてもらえないことにショックを受けていた。Bf が勝ったのだが、棋力の差を感じ、あまり楽しめなかったのかなと筆者は思った。表情も楽しそうには見えなかった(6月10日)。

Bf の参加 2 回目のとき、今回は前回より参加者が多かったため Bf は嬉しそうだった。帰るときは、「またね、白濱さん」と笑顔で帰っていった(6月20日)。

Bf の参加 3 回目のとき、自分の名札が作られて飾ってあるのを見た Bf は、「白濱さん、札ありがとうございます」と笑顔で言っていた(6月30日)。

Bf の参加 4 回目のとき、筆者は初めて Bf と対局した(7月10日)。

Bf の参加 6 回目のとき、将棋大会に来てくれている理由として、「枯れ木も山の肥やしですから」と笑いながら何度か言っていた。この日筆者と対局をしたとき Bf は、「教えてもらおう、(参加費の 500 円は)受講料やから」と冗談で言っていた(7月30日)。

Bf の参加 7 回目のとき、Bf は「暑いねえ」とにこにこして言っていた。いつもの感じだった(8月10日)。

Bf はこの後も、いつも笑顔で将棋大会に訪れ、楽しそうに将棋を指していった。また、Bf は Bg を誘って指すのが好きなのでよく Bg を誘って指している。また Bf は、筆者もよく誘って指してくれる。

事例 13 Ga

Ga は大學堂に遊びに来てくれる新聞記者である。本将棋大会のことも取材し、記事にしている。将棋大会初日、Ga は様子を見に、そして取材に来てくれた。

「そしたら僕も参加しようかねー」と言って参加してくれた。そうして Ga と Aa の対局が始まった。一番、市場に面した雰囲気の良い場のため記者による撮影ラッシュが始まった。Ga は Aa との対局が終わると、「私も写真撮りたい」と笑いながら言って、撮る方にまわり、取材を行っていた。また、Ga はこの日 6 ポイント取り、喜んでいった(6月10日)。

次の将棋大会で Ga は、「今日は強い人ばかりだね。全然勝てない」と言って笑っていた(6月20日)。

事例 14 筆者

筆者も他の参加者と同じで将棋が好きである。しかし筆者はよく負ける。そのような筆者でも、他の参加者は筆者に「指そう」といって誘ってくれ、見守ってくれている。それは上記の記述からも分かることであるが、さらにもう少し紹介する。

筆者が Ed と対局したときのことである。Ed と筆者には明らかな棋力の差があるのだが、Ed は指導将棋のような対局をし、筆者に勝たせてくれた。「みんなには強かったと言っておきますね」と言っていた(9月30日)。

Ga と久しぶりに対局した。Ga は「おお違うねえ、強くなってるねえ」と言っていた(10月10日)。

本将棋大会の参加者の最少年齢は 5 歳であり、また、最高年齢は 84 歳であった。このことから将棋というイベントには広い年代が集まるということが分かる。また、Bf 以外にも常連になっている参加者は多い。本将棋大会に参加する人達は、なぜここに来て、どのようなことを求めているのか。

例えば Ba の場合、いつの間にか将棋を勉強するようになった Ba に、本での勉強や、インターネットでの対局だけでなく、実物の盤駒で、人と対面して対局をさせてあげたいと保護者が思い、連れて来たと考えられる。また、Ba は実際どのように将棋を指すのか、保護者も気になったのだと思われる。そして 2 回目に連れ

てきたとき、「ちょっと相手できる人はいますか?」と尋ねてきたことから、棋力の差が開きすぎていない人、Ba が楽しんで将棋を指せる相手がいい、と思ったのだと考えられる。

そしてこのような、他の参加者とは違った参加者の存在は、大きな役割を果たしている。幼い子どもがひとり将棋大会にいるだけで、場はにぎやかになる。5 歳という年齢の子で将棋を指す子はなかなかいないので、参加者も気になったと思う。この子がどんな将棋を指すのかみてみたい、と参加者は思ったであろう。そのように、Ba という参加者がいることで将棋大会は、より面白みが増すのである。

また Bc が、「何度も参加して、お互い棋力が分かりあっている人もいれば、初めて指す人もいて、全く分からない状態でも指せる」という点も良いところだと言っていたことから、そういった何度も対局して知っている人や初めて対局する人、両方がいることが大事なのだと思う。何度も対局をしたことがある人と指す場合は、相手のことを知っているから安心感がある。しかしいつも同じ相手だと、マンネリ化してしまう。本将棋大会は、ほとんどが常連であるときも多いが、それでもあまり見かけない人、初めて参加する人達は存在する。そのような人達と対局するときは、「この人はどういう人で、どういう指し方をするのだろうか」という緊張感や期待感がある。

将棋は棋力に差があると楽しめない、と思う人は多い。例えば Bf は、最初棋力に差がありすぎて楽しめていなさそうであったが、Bg や筆者をよく誘って指していることから、棋力を知っていて勝ったり負けたりという対局を楽しめる相手が良いのだと思う。また Ga が、「今日は強い人ばかりで、全然勝てない」と言っていたことから、やはり棋力がそれほど高くない人の存在は、大事なのだと思う。

さらに Bc は、「ふらりと来て、時間を気にせず将棋をさせる」という点が良いと言っていたことや、たくさん対局を重ねるといふよりゆっくり人の対局を観て休憩をと

ることから、のんびり楽しみたいといった様子が伺える。それに対し Bb はたくさん対局を重ねることからも、観るより指したいのではないかと思う。そのようにこの場に求めることは人によって違い、そういった人達がここでは一緒に過ごしているのである。

本将棋大会は、勝ち負けよりも遊びに来ている、楽しみに来ているという人が多いように感じられる。例えば Bb は、Jb の発言からも Bb の様子からも、遊びに、楽しみに本将棋大会に来ている、と考えられる。Bd も Bb と同じく、たくさんの対局をするが、対局自体も楽しんでいるし、対局者達とのやりとりも楽しんでいる。Be も、時折話をしながら楽しそうに指しているし、より楽しくしようとしている。参加者達は皆、この場を楽しい場にしようという気持ちを持っており、その想いは対局中の発言などに現れている。この場は対局者達の、そういったやり取りによって作られているのである。



本将棋大会の様子

4-2-3 参加者の行動

前節では、本将棋大会にどのような参加者がいるのか紹介した。また、参加者の対局中のやり取りや発言などから、参加者自身がこの将棋大会を楽しんでいるようにしていると述べた。本節では、具体的に参加者はどのようにして将棋大会を作り上げていっているのか、事例を通してみていく。

事例 15 机や椅子が足りない

この日の将棋大会参加者は 39 人。机や椅子は大聖堂備え付けのものだけでは足りなかった。そのため Aa や参加者は、ビールケースを積み重ね机を作った。それでも足りなかったので、参加者はいつの間にか大聖堂隣の豆屋の、商品を並べる台の上で対局を行っていた。それはその日豆屋が閉まっていたからできたことであつた。将棋を指す場を十分に用意できなくて申し訳ないのだが、そこは他の店の、商品を並べる台の上なので、移動してもらった(6月30日)。

事例 16 駒置きがない

本将棋大会では駒台がないため、参加者は駒を机や駒入れの上に置いている。基本的に駒は、対局相手に見えるように置いている。しかし、ある対局において持ち駒に関するトラブルが起こってしまった。それは Ec と Bg の対局のときである。Ec は Bg に持ち駒は～ですね、と確認した。Bg は「うん」と答えた。それから数手後、口論が起こった。Bg が持っていると言わなかった駒を本当は持っていたようだ。Bg は持ち駒を隠してまで勝とうとする人ではないので、おそらく持ち駒を確認されたときにあまり聞いてなくて適当に返したのではないかと思う。対局後も Ec は Bg と再度対局するのを控えていた。このことがきっかけで Ec と Bg が将棋大会に来なくなってしまったらどうしようかと筆者は思ったが、両者ともその後も参加してくれているので安心した(9月10日)。

事例 17 システムの変更

Bl は将棋大会に来ると、「(受付のときに)名前と住所と年齢を書いてもらったらいいい」とアドバイスしてくれた。今までは受付のとき、名前と電話番号しか書いてもらっていなかったのだが、Bl のアドバイスにより年齢も書いてもらうようにしていった。住所はいらないかなと筆者は思ったが、参加者層を知るためにも年齢は書いてもらう方が良くと思い、その日から年齢も書いても

らうことにした(6月30日)。

Bi はメモを持って将棋大会に来た。そのメモには、将棋大会の対局相手の決め方の案が書かれていた。「将棋大会では(一般的に)こういうやり方がある」と Bi は言う。その提案はトーナメント方式で対局を行うというものだったのだが、筆者は今の将棋大会の方法で続けたいと思ったため、変えなかった。

また、おそらく Be だったと思うのだが、将棋大会でない日に大學堂にやってきて、将棋処香車用の将棋大会の対戦表をくれた。その人が手書きで作ったものであった。

事例 18 名前を言わない

Bi に受付で名前を書いてもらおうとしたら、「匿名で…」と言われた。本名を名乗るのが嫌そうだったので、ニックネームにしないかと尋ねた。すると「ゲストで…」と言われた。そのため Bi を匿名さんと呼ぶことにした。受付で名前を覚えてもらえなかったのは Bi が初めてである。Bi は隅の方に座っており、自分から人を誘って対局はしないが、筆者や他の参加者が誘うと指してくれる(6月20日)。

受付で「お名前お願いします」というと、「顔がばれるといかん」と言われた。筆者は「追われてるんですか?」と笑って返し、「ゲスト」と記入した(8月10日)。

事例 19 差し入れをくれる参加者

Bm は将棋大会の日、ケーキを差し入れしてくれた。Bm は「この前は(筆者が Bm 家に将棋大会の景品を届けに行くのが)速かったね」と言っていた。先日、将棋大会の景品を筆者が自転車で Bm 家まで届けに行ったので、そのお礼かもしれない(7月10日)。

Bd は、「これ、みんなで食べて」と言ってチョコレートを差し入れしてくれた(8月20日)。

Ac は、日頃よく大學堂で将棋を指しており、この日も将棋大会をのぞいていた。Ac は将棋大会後、「これ、いつも楽しませてもらっているから」といってケーキを

差し入れしてくれた(10月30日)。

本将棋大会はこのように、参加者が作り上げていく形になった。参加者が作り上げているというのは将棋を指す場としてあげられる、青空将棋、将棋クラブ、イベントのなかでも、青空将棋にみられる特徴である。青空将棋では、将棋指し自身が、将棋を指す場を作り上げている。そのようなことが本将棋大会でも起こっている。机や椅子が足りなくて将棋が指せないというときに、Aa を含む参加者はビールケースなどを机にし、また、将棋が指せそうな場を見つけて、対局を行っていた。これらは参加者が考え、行動に移している。このように自分達で将棋を指す場を作り出す、というのは青空将棋と共通している。

さらに青空将棋では、トラブルを起こして困るのは将棋を指す自分達であるということから、トラブルは小さなことから解決している。そして本将棋大会でも、トラブルは参加者によって解決されている。駒置きがないことからトラブルが起きて口論になってしまったが、だからといって両者とも将棋大会に来なくなるということはない。それから、将棋大会に来て将棋を楽しみ、しかし、持ち駒のトラブルは起こらないように気を付けている様子がみられた。何か問題が起こると、困るのは将棋を指す参加者達である。そのため困った状況は、参加者達で改善していった。

青空将棋ではほぼ決まりが無く、決まりがあったとしてもそこで将棋を指している人達によって決められた決まりである。一方将棋クラブでは、決まりが決められており、それを守らないといけない。筆者は最初、決まりを作った。決まりについて、参加者の意見を聞いた方がよいということまで考えていなかった。そのため「こうしたら改善できるのではないか」という参加者がいたことは正直驚いた。そして本将棋大会は、青空将棋と将棋クラブの中間のような場だから、参加者も決まりを決めることについて関わるものなのだ、ということに気付かされた。参加者のアイデアによって決まりは改善

され、本将棋大会はよりよくなった。また、受付で名前を書かないという参加者がいたとき、確かに、青空将棋のことを考えてみれば、お互いの名前を知らないことは普通であるし、本将棋大会に参加するにあたって、名前は必ずしも必要ではないと気付かされた。本将棋大会が、大会に関する全ての人によって形作られるような場であるということを、参加者の行動から教えてもらった。また、筆者に対して参加者達は優しい。対局中も楽しませてくれるだけでなく、普段から気遣い差し入れなどもくれる。

4-2-4 参加費を払わずに将棋大会に参加する人

次に、参加費を払わずに将棋大会に参加する人の事例をみていく。将棋大会の参加費は1回500円である。ほとんどの参加者は参加費を払って将棋を指すが、稀に参加費を払わずにいつの間にか指している人、参加費を払うことを強く拒否する人がいた。このような人達はどのような気持ちで将棋大会に参加しているのだろうか。このような人達の事例をみていく。

事例 20 Ca

Ca はいつの間にか将棋大会に参加し、2局指していた。このことが分かったのは将棋大会が終了し、Ca が帰った後だった。Ca と対局を行なった Jc は、Ca との対局について次のように記述している。

3戦目はフラリとやって来たおじいさん。
僕が勝ちました。相手は悔しそうでした。
相手は悔しさをかくそうとしながら、おじいさんが好きなスマートフォンなどの最新機器の話や、Wi-Fi の活用法を教えてくださいました。
僕よりずっと、おじいさんは詳しかった。
少しお話をして、悔しさをお忘れになったとき、もう一度対局を申し込まれました。僕はまた、勝ちました。
おじいさんは言いました。「負け負け、俺の負け。」

前の一局に増して、悔しそうでした。

僕は自分が勝ってしまったことで、おじいさんに突っぱねられた様に感じました。

少し気を遣いながら、それから20分ほどWi-Fiについて話をしてくれました。気を遣っていた事に重ねて、あなたのWi-Fiのパスワードは？と言われてたりしたので、僕は少し謝った警戒をしたりして、おじいさんに心理的な距離感を覚えてしまいました。

おじいさんは最後に、悔しそうに「帰るか」といいながら、僕の手帳を取って、ペンで何かを書きました。

手帳には、こう書かれていました。

朝は希望に起き、
昼は努力に生き、
夜は感謝に眠る。

おじいさんは「いい言葉やろ？」と言い残し、涙目を覗かせて帰って行きました。僕は、ありがとうございますと言って、頭を下げずにいられませんでした。
将棋の勝ち負けだけの関係から、人間関係に移行する瞬間を感じました。

筆者はこの日同じ場にいたのだが、上記のようなやり取りがされていることに気付かなかった(6月10日)。

Caの将棋大会の参加費は未納だが、参加者であるため、筆者はCaの名前の札を作ってボードに掛けた。そして次にCaが将棋大会に来たときは、Caは参加しなかったが、Caの名前の札だけが裏返しになっていた。Caが裏返したようだ。また別の日、Caが将棋大会に来ていたので、将棋大会に参加するには参加費が必要だと説明した。Caは名札が掛けてあるから参加できるのではないかと言うので、名札は来て頂いた人の名前を掛けているためそれがあるからといって将棋大会に参加できるわけではないということを説明した。この後の将棋大会でもCaは、「観るだけ」と言っている間にか指していた。

事例 21 Cb

Cb は将棋大会に来て筆者と話をした。しばらく筆者と話した後、Cb は将棋大会に参加しようとした。参加費がいるということを説明したらCbは、「500円は高い」と言って頑なに参加費を払うことを断った。筆者が強く言うこともできるが、それは場の雰囲気が悪くなるためできなかった。Cbは結局「半分だけ払うから残りはツケといて」と言い、250円だけ払った(9月30日)。

後日、閉店間際の大學堂に来て、対局をしないかと筆者を誘った。この間の参加費の残りの話をすると去って行った(10月17日)。その後将棋大会に来ることはあっても、参加者の対局をひっそりと観戦し、筆者とあまり目を合わそうとしなかった。

事例 22 Cc

将棋大会中、いつの間にか Cc は縁台で将棋を指していた。そのため対局後に参加料を払ってもらおうとすると、「知らなかったから」「Aa に指そうって誘われたから」と言って払わなかった。その後 Aa に Cc の話をすると、Aa が今度 Cc に言う、払わなかったら自分が払う、というので Cc の代わりに払うことはしなくていいと筆者は答えた。また、Aa の話によると、Aa は Cc と対局するときに参加費がいることを話していたそうだった。それならば、Cc の「知らなかった」という言葉は嘘ということになる(11月20日)。

本将棋大会の参加費は 500 円である。料金を取っているという点は将棋クラブと共通する。たしかに青空将棋では無料で指せるため、青空将棋と比べれば 500 円は高い。しかし将棋クラブでは成人男性は普通 1 日 1000 円ほど席料として払うので、将棋クラブに比べると安い。本将棋大会では、決まり通り参加費を払う参加者がほとんどだが、おそらく参加費を払って参加する人は、お金を払って将棋を指すことにそれほど抵抗を持っていない。おそらく、将棋を指す場として、将

棋クラブのような場のイメージを持っており、参加費を払うことは自然なことであると思っているのではないだろうか。そして頑なに参加費を払うことを拒む人は、将棋を指す場として青空将棋のイメージを持っており、将棋を指すのにお金を払う、ということに違和感を持っているのではないか。

4-2-5 観戦者

先述したが、将棋を指している光景は通行人に対して「立ち止まる」「盤面を覗く」という行為をアフォードし、そしてその行為は人々に受け入れられている。また、近所の人や通行人が将棋を指す「縁台将棋」は昔から日本で行なわれており、人々は見慣れている。

そして、将棋大会に参加するまでの時間がない、あるいは参加しづらいとも思っても、観戦者という立場であれば将棋大会に関わりやすい。観戦は時間の拘束もなく、棋力に関係なく行なうことができるためだ。さらに将棋が開かれた空間で指されることで見せ物になり、観戦することで対局者達の境遇を把握することができ、その場を共有することができる。筆者は、そういったことしか考えていなかったのだが、実際、観戦者は将棋大会に巻き込まれる存在というより、その場を作っている人であった。

例えばある観戦者は、対局中に頻繁に突っ込みをいれていた。対局者の一人が、「真剣に指していますので」とその人にいうと、その人は静かになった。そしてしばらくすると対局者両者にお茶を汲んで持って行った(11月30日)。

観戦者の多くは黙って見ているが、突っ込みをいれる人もいる。また、観戦者の中には昔真剣(お金を掛けて将棋を指すこと)をしていたという人もいる。さらに本将棋大会には、「常連の観戦者」もいる。

このように、観戦者にも様々な人がいて、観戦者がいることで将棋大会は賑わう。観戦者がいないと、本将棋大会はとてもさみしいものになってしまう。観戦者には黙って観ている人もいれば、色々と言う人もいる。

両者ともがこの場を形成しているのである。

4-2-6 様子を見にくる人

本将棋大会は、青空将棋の要素や将棋クラブの要素、イベントの要素を持つことから、少し興味を持って、様子を覗に来てくれた人達がいる。将棋関係者(本論文で示す将棋関係者とは、将棋クラブや将棋業界に携わっている人である)や、市の職員などである。これらの人達の事例をみていく。

事例 23 Ea

Ea は山口県にある将棋同好会に関わっており、将棋の指導や普及をしている人である。Ea はこの日将棋大会に来ると筆者に、Ea の将棋同好会への行き方をインターネットからコピーしたものを渡してくれた。また、その将棋同好会に行ったときのスケジュール案(対局時間やティータイムの時間など)が書かれたものももらった。Ea は、大阪まで行ったという筆者と対戦してみたことだったが、その後参加者も増えて筆者は Ea と対局することはなかった。Ea は最初、九州フィールドワーク研究会のメンバーJcの父Bkと対局を行った。Bkの話によると Ea の指し方は割と普通であったとのことだった。そして1局め、Bkが勝った。1局めを終えてすぐEaはBkに「もう1回やりましょう」と言った。2局めは、Eaが勝った(6月30日)。

将棋大会前、Eaから大學堂に電話があった。筆者が借りていた、中国象棋の資料は無事受け取った、下関にもぜひ遊びに来てほしい、また今度将棋大会に行く、といった話をした。筆者は中国象棋をもらったこと、将棋大会に来てくれることのお礼を述べた(8月10日)。

事例 24 団体

福岡市から、ラジカル将棋部の人たちと日本将棋連盟福岡西支部の人たちが来て、将棋大会に参加した。福岡市の方の大会のチラシや、ラジカル将棋部の「酒場文芸誌 ラジつう」という読み物ももらった。「酒場文

芸誌 ラジつう」には、ラジカル将棋部の説明が載っていた。福岡市早良区西新の怪しげなバーを拠点とする将棋同好会であるとのことだった。さらにその人たちの内の一人の話によると、福岡でも縁台将棋をしているそうである。また別の人は、将棋は女性がしないと広まらないと話していた。その人たちは将棋大会に参加した後、筆者と九州フィールドワーク研究会のメンバーの写真を記念に撮って帰った(6月30日)。

事例 25 Eb

Eb は将棋が強い人として、この辺りでは名を知っている人も多い。本将棋大会ではほとんど負けていない。

この日 Eb と Bn が対局を行っていた。感想戦のようなものまでしていて、Bn は「今日(Ebと)指せてよかったです」とEbに嬉しそうに言っていた(7月10日)。

Bc は、「そういう(強い)人とも指せて嬉しいですね」と、Ebと対局するときに言っていた(7月10日)。

事例 26 Eb と Fb

Fb と筆者は Ko 将棋センターで会ったことがある。Ko 将棋センターで本将棋大会のことを知った Fb は遊びに来てくれた。Fb に、Eb という強い人が前回の将棋大会に来た、と筆者は話した。すると Fb は Eb のことを知っていた。その会話の少し後で、Eb が将棋大会に来た。そして Fb と Eb の対局が始まった。Fb は結果を言わなかったのだが、おそらく Fb が勝ったのだと思われる。Eb は筆者に、「あの若い人(Fb)は強いね。真剣に指さんと負けるわ」と話した(7月10日)。

Bl は将棋大会に来てすぐに、Fb はいないか尋ねてきた。この日 Fb は来ていなかったので Bl は残念そうだった。Bl は前の将棋大会で Fb に 3 敗しているため、リベンジしに来たとのことであった(10月30日)。

事例 27 Ee と Ef

Ee と Ef は兄弟であり、両者とも中学生である。少な

くとも福岡県の将棋関係者で、この兄弟を知らない人はいないのではないかとはいえないくらい有名な2人である。両者とも口数は少なく、そして対局では全勝していた。せっかくなので筆者は、本将棋大会で使われている天童の駒を両者に見せたのだが、あまり反応はなかった。良い駒に見慣れているのかもしれない。また、Efと指したBoは、Efの強さが嬉しいのか、3回連続で対局していた(7月20日)。

事例 28 旅人

この日将棋大会に旅人が来た。この旅人は将棋を指す場を求めて旅をしている人であった。旅人は大阪の将棋事情について筆者に教えてくれた。筆者と一通り話した後旅人は将棋大会に参加した。対局中は一切しゃべらず、そして対局後も勝敗を告げずにいつのまにか帰っていた(8月20日)。

事例 29 市役所の人

将棋大会中、北九州市役所の観光課の人達が来た。筆者は対局中だったため名刺だけ渡され、「時間があるときに電話してほしい」と言われた。今度北九州市で「将棋の日」という全国的なイベントが開催されるので、その関係で話をしたいとのことであった(7月30日)。

筆者が電話を掛けると、「将棋の日」イベントをぜひ将棋関係者に宣伝してほしい、筆者にも来てほしい、ということであった(7月31日)。

「将棋の日」イベントというのは、11月17日の「将棋の日」という日に合わせ、全国で1か所、日本将棋連盟と地域の自治体の主催で行なうイベントである。今年には北九州市制50周年ということもあり、北九州市が誘致していた。筆者は当日まで何度か打ち合わせをし、11月17日のイベントに参加した。

筆者はこのイベントのメインであるNHK公開収録の「次の一手名人戦」という森内俊之名人 vs 羽生善治三冠の、次の一手の予想解答者を務めた。この収録では大ホール、客500人が見守る中、ステージで森内名

人と羽生三冠が対局を行う。その対局を途中で中断し、「封じ手」をする。棋士は次に指す手を専用の用紙に書き、封筒に入れる。次の一手予想というのは、この、紙に書かれた次の一手が何であるかを予想することである。筆者は序盤・中盤・終盤の3回、予想を行った。番組では本将棋大会の紹介もされた(11月17日)。

このように、本将棋大会の噂を聞いて、将棋に関わっている人達が遊びにきた。福岡市や山口県などから来るのは遠かったであろうと思う。遠いため、頻繁にここに来ることはできないが、Eaや福岡の団体、市役所の人達は、同じ将棋に関わるものとしてつながろう、と誘ってくれたので大変嬉しかった。将棋には将棋業界があるため、そのようなつながりが生まれる。本将棋大会の枠を超えて、そういった人達ともつながれるのは嬉しいことである。そしてそのように、強い人や常連ではない人がときおり将棋大会に来ることは、筆者を含め、大会参加者の刺激になっている。

第5章 縁台将棋大会開催時以外の事例

縁台将棋大会が開催されたのは、将棋そのものに可能性があったからという理由だけではない。大學堂の近くに個人商店を営むAaという人がいて、Aaが昔から、且過市場の自分の店先に盤駒を広げ、商売しながら道行く人と将棋を指していたからである。

それがきっかけで、大學堂の営業時間中に通路側に将棋盤と駒を置くこととなった。置いているとAaをはじめとする市場の人や、通りすがりの人が将棋を指し始めた。そしてそれから、縁台将棋大会が始まったのだ。

前章では、縁台将棋大会についてみてきた。本章では、縁台将棋大会が行なわれていない時間、つまり10日20日30日の14時～17時以外の時間では、同じ場で何が起きているのだろうか、みていきたい。

5-1 大學堂営業時の将棋

大學堂の定休日は日曜・祝日・水曜日であり(2013年9月から木曜定休を水曜定休に変更した)、営業時間は10時~17時である。将棋大会は毎月10日20日30日の14時~17時に行っているが、将棋大会の日以外でも大學堂の営業時間は将棋の盤駒を1セットだけ置いている。置いている場は大學堂の通路側である。将棋盤はただ置かれているだけだが、人々は将棋を指した。日頃の大學堂で将棋を指しているのは市場の人や通行人である。大學堂で将棋を指す市場の人は主にAa、Ab、Ac、Adの4人である。Aa、Ab、Acは大學堂近くの店で商売を営んでいるが、Adの店は大學堂から少し遠い。それら市場の人が将棋を指している事例、通行人が将棋を指している事例を紹介する。

事例30 市場の人の将棋

Aaは大學堂に将棋の盤駒を設置する前から大學堂に関わっていた。将棋がとても好きな人で日頃から大學堂で指している。

Abは大學堂に将棋盤を設置してから対局によく大學堂へ来る。将棋大会の日もそうでない日も、大學堂で指している。AbはAaから筆者が将棋を指すという話を聞き、対戦したいと筆者を尋ねてきた。これが筆者とAbの出会ったきっかけである(6月11日)。

また、Abは色々な人からうっかりミスが多いと言われている。本人も自覚しているが、他人にそれを言われると少し怒ることもある(7月3日)。

Acは市場の人であり、かつ大學堂で将棋を指す唯一の女性である。AcはAaやAbに誘われて将棋を指す。また、日頃の大學堂でAcは、通りすがりの将棋を指したそうな子どもをすばやく見極め、指さないかと誘う。

上記の3人は大學堂から自分の店が近いので、店にお客さんが来ていないか様子を見ながら対局を行

なうことが可能である。しかしAdの店は大學堂から少し離れているためそれができない。Adは仕事の合間か、仕事が終わってから将棋を指しに大學堂に来る。Adは新聞の棋譜やNHKの将棋番組を見ているらしい。AdはAaのことを「Aaは将棋を始めたばかり」「Aaの将棋見よったけどあれ弱すぎ」と言う。また、AdがAaとの対局中に王手銀をかけたとき、Aaは銀を逃がしたことから、「王より飛車をかわいがりっているのは聞いたことあるけど王より銀をかわいがるっち」と、対局から数日たっても爆笑していた。さらに、Adは頻繁に「今Aaに何勝何敗で、Abに何勝何敗で、Acに何勝何敗」ということを伝えてくる。市場の人で、かつ将棋を指す人の中で対局結果をはっきり覚えているのはAdくらいであろう。

事例31 通りすがりの人の将棋

若い母親と子が将棋を指していた(6月22日)。

将棋盤を見て「いい盤ですね」という年配の男性がいた。その人は将棋のルールを知らないそうなのだが、将棋に興味を持っていた。その人は「子どもの頃に将棋を指す機会が無かった」とも言っていた。それで筆者は、それぞれの駒は何をモチーフにしているのか(角が象で飛車が戦車など)という話や駒がそれぞれどういう動きをするのかという話をした。するとつかの間に3~4人の人が集まってきた。そのなかにはAaもいた(6月28日)。

ハローキティのぬいぐるみを持った年配の男性と、いつも大學堂近くの横断歩道でギターを弾いている年配の男性が将棋を指していた。ギターを弾いている男性は日頃大學堂に見向きもしないが、将棋盤と駒を設置すると足を止め対局を行ってくれた(7月3日)。



通りすがりの親子が将棋を指していく

将棋の盤と駒はただ置いているだけである。大会を行なっているわけでもなければ宣伝をしているわけでもない。しかし人々は集まり、将棋を指した。なぜそういうことが起こったのか。3つの要因が考えられる。

第一に、将棋の盤と駒が置かれているという状況が、人間に対して「指す」という行為をアフォードし、さらに将棋を指している光景が通行人に対して「立ち止まる」「盤面を観る」という行為をアフォードしたからだと考えられる。

第二に、将棋の盤と駒は通路側に置かれているため、大學堂の中に入らなくても将棋が指せる。そのため市場の人も自分の店が近ければ、店に客が来ているかどうかを見ながら将棋を指し、店に客が来たらすぐに店に戻ることができる。大學堂内に入らずとも将棋が指せるため、通行人も利用しやすかったのではないかと考えられる。

第三に、これが一番重要なことであるのだが、Aaがここに将棋を指しに来ているということである。大學堂の営業時間に、一番この台で将棋を指しているのはAaである。市場の人がここで将棋を指し始めたのも、Aaに誘われて指し出したのがきっかけとなっている。Aaはよくこの将棋盤が置かれてある椅子に座り、駒を動かしており、色んな人を誘って将棋を指す。Aaはすごく強い人ともためらいなく将棋を指す一方、駒の動かし方ですらよく分からない人でも誘って指そうとする。相手の棋力は気にしていないようだ。いつも「勝ち負け関

係ない」と言っているが、もちろん適当に指しているという意味ではなく、将棋を指すことでコミュニケーションをとる、相手の心が分かる、ということで、それを大事にしている。筆者もよくAaと指していたので、Aaは筆者の心も分かっているようだ。

次に、これらの将棋盤と駒にまつわる事例を紹介する。

事例 32 管理するものではない

昼に大學堂の店長から、表に出している将棋駒の、銀1枚と香車1枚が無いという知らせを受けた。筆者は大學堂へ行き、1階と2階、そして周囲の店の閉店後に、周囲の店の前も探したが、見つからなかった(6月14日)。

九州フィールドワーク研究会のメンバーに話を聞いて考えたところ、駒が紛失したのはおそらく6月11日、大學堂で即興ライブをしていたときである。ライブ中、酔ったAaが筆者の気付かないうちに盤と駒を借りてa店の前で指していたらしい。その盤と駒は大學堂に返却され、次に駒を確認したときには2枚無くなっていたとのことだ。筆者はとりあえずa店の前を探したが見つからなかった。そしてAaは、駒が無くなったことに自分が関わっているかもしれないとは気付いていないようだった。筆者はAaに、駒が無くなってしまい探しているのを見つけたら教えて欲しいということだけ伝えた。

それから4ヵ月後Aaは「自分は駒を無くすようなことはほしくない」と言っていたため、実は、無くしたことがあるかもしれないよと、そのときの話をAaにした。Aaは「ほんとか?すまん」と筆者に言った。

筆者は駒が無くなったと知ったとき大変ショックだった。Aaが無くしたかもしれないとなると、Aaに腹を立ててしまった。しかしAaにはお世話になっているし、今後も関わっていく。そのため腹を立てているが、Aaを責めることができず、もどかしい気持ちになった。

しかし実際、腹を立てるといふ筆者の行動自体、適切なものだったのだろうか。日頃の大學堂で将棋を指すことは、青空将棋や縁台将棋で将棋を指す場合と

ほとんど同じである。筆者が毎日ここに来て指しているわけではないし、筆者が管理している場ではない。ここは誰もが将棋を指してよい場なのである。そして将棋盤も駒も、筆者の所有物ではない。ここで将棋を指す皆のものである。ここは管理される場ではないのだ。駒が無くなって困るのは、筆者ではなくここで将棋を指す人達である。そのため駒が無くなって腹を立てるといふ筆者の自体、適切ではないと考えられる。

続いて、将棋関係者が訪れた事例を紹介する。

事例 33 Ea が大學堂に来た

Ea はおそらく将棋大会の噂を聞いて、大學堂を知ったのではないかと思われる。Ea は山口県にある将棋同好会に関わっており、将棋の指導員をしている人である。Ea は九州フィールドワーク研究会のホームページに、象棋の盤と駒を寄贈したいと書き込んでいた(6月21日)。

Ea は中国象棋を持って大學堂に筆者を尋ねてきたが、筆者は不在であった。Ea は筆者と将棋の話や中国象棋はあるかどうかという話をしたかったとのことだ。Ea は筆者に見せるつもりであったであろうプレゼンを、その日の大學堂店長の Jd と Je と Jf に見せて帰った。筆者はそのプレゼンのデータと中国象棋、中国象棋に関する資料、Ea の連絡先のメモをその後 Jd から受け取った。プレゼンは将棋の発祥や世界各地の将棋の紹介、日本の将棋の説明や詰め将棋の問題などを紹介するものであった。また、中国象棋に関する資料はコピーして、原本は8月上旬までに Ea に郵送で返却してほしいとのことだった(6月22日)。

事例 34 旅人が大學堂に来た

この日「将棋の先生はいますか」と聞いてきた旅人がいた。筆者はこの日いなかったため、その日の大學堂店長 Jg が筆者はいないことを伝えると、大學堂に飾っている手作りの大盤を一人で動かして、「この形は絶対に破れない」と言って囲いを作った。縁台に出し

ている盤の方も一人で動かして、「Aa って強いんですよ」と Jg に聞いてきたので Jg は、「Aa は将棋をよく指される方なんですけど今ちょっとお仕事なので…」。「縁台将棋大会の日には人が集まって指してるんですけど、日頃は来るお客さんが指してるという感じです」と答えた。旅人の、「いてはりますか」の部分は関西弁だが、他は関西弁らしくなかったので、関西の人かどうかは分からない。大盤は、ある若手プロ棋士の囲いになっていた(7月16日)。

その後も日頃の大學堂に来て将棋を指していた(8月23日)。

Ea がここに来たのはおそらく将棋大会の噂を聞いたからであるが、将棋を指す場を求めて旅する旅人は、大阪から来ており、ここで将棋大会がされているということを知らずにここを見つけている。なぜここで将棋を指しているということが分かったのかと旅人に聞くと、「市場を歩いていたら、将棋の盤駒があったから」といふ。筆者は本将棋大会で旅人と知り合い、これがきっかけで多くの将棋指しに出会うこととなった。

5-2 大學堂閉店時の将棋

大學堂は17時に閉まるが、大學堂が閉まった後や大學堂の定休日である日曜日なども、大學堂周辺で将棋が指されている。これは完全に青空将棋である。そしてこの青空将棋の中心になっているのも Aa である。Aa は自身の店の前で将棋を指し、多くの店が閉まる日曜日には、大學堂隣の豆屋の商品を並べる台の上で将棋を指している。日曜日にはいつも5~6人ほど集まるらしい。そして実はここには、縁台将棋大会で参加費を払わずに将棋を指していた Ca や Cb が居て指している。Aa は Ca や Cb と仲が良い。Aa と Ca は肩を組んで笑いあっていることもある。

また、Aa は Cb に最初会ったとき、将棋大会中に何か色々言いよったやつ、などとあまり良くは言っていなかった。しかしその数週間後、Cb が将棋大会で250円だけ払って参加していた、という話をすると、「あいつは

そんな奴やない。俺は知ってる。俺が言っちゃる。払わんやったら俺が払う」と言う。いったい何があったのだろうかと筆者は思ったが、実はあれから、大學堂が閉まっているときに Aa と Cb は何局も将棋を指していたとのことだった。

Aa は将棋大会が始まる前から縁台将棋を指しており、さらに将棋大会が始まると、大会でも将棋を指し、そして大學堂の開店時、大學堂でも将棋を指しており、そして大學堂が閉まっているときも、将棋を指している。どの場にも関わっているのが Aa であった。

そして、将棋大会で参加費を払わずに将棋を指していた Ca や Cb は、大學堂のすぐ横で指していたのである。お金を払って将棋を指すのに違和感を持っているので、ここで指しているのであろう。

第 6 章 考察

筆者は最初、運営者として場をつくろうとしてきた。そして場を作りだすために将棋を用いた。それは将棋には、たくさんの人を引き寄せる力があると思ったからだ。しかしそうやってつくられた場では、筆者の予期しないことが次々に起こった。そもそもここに集まる人の特徴はひとりひとり違い、そしてそれらの人々の、複雑な関係性から生じる出来事を予期するのは不可能であった。筆者が管理していくことはできなかったのだ。それではこの場はどのようにして形成されたのか。

6-1 キーパーソン Aa の存在

この場の中心人物となっているのは Aa であった。Aa は将棋大会が始まる前から縁台将棋を指しており、さらに将棋大会が始まると大会でも将棋を指した。そして大學堂の開店時に大學堂でも将棋を指し、また大學堂が閉まっているときもすぐ近くで将棋を指している。これら将棋を指すあらゆる場に関わっているのが Aa であった。

アフォーダンスについては 1 章で、ある事物がある知覚者にとってどのような行為をアフォードするかは、

その事物の持つ属性だけではなく知覚者の属性やスキルにも依存すると述べた。将棋の盤駒の「指して遊ぶものである」という属性だけが、Aa のあらゆる行為をアフォードしているのではない。Aa の将棋を指せるというスキル、将棋を指すことが好きであるという性格、将棋を指すことによって生じる人との交流を大切にしたいという想いが、より Aa の将棋に関わるあらゆる行為をアフォードしていた。

そのため Aa は、店先に将棋盤を出し将棋を指しており、大學堂に将棋盤が置かれると誰よりも将棋を指しに来て、市場の人を誘い将棋を指した。Aa はよく色々な人を誘って将棋を指し、棋力の高い人ともためらいなく将棋を指す一方、駒の動かし方ですらよく分からない人でも誘って指そうとする。相手の棋力は気にしていなかった。

そして将棋大会を開催するというを知ると、自分が盛り上げようと考え、そして将棋大会が始まってからも、参加者が少なければ自ら参加者となり大会を盛り上げ、人を呼び、将棋大会にもすすんで協賛した。スポンサー決めも Aa が判断して行っていた。

また、Aa は人のことをよくみており、将棋大会参加者のこともよくみている。Aa はどのような人とも仲良くなる。Aa がさまざまな人とやり取りを行うことで、将棋大会という場はつくられていった。

そして Aa はいつも「将棋は勝ち負け関係ない」と言っているが、もちろん適当に指しているという意味ではなく、将棋を指すことでコミュニケーションがとれる、相手の心が分かる、といった意味であった。そしてもちろん将棋という遊び自体も大好きで、「将棋はほんと面白い」とよく言っている。このように Aa は将棋が好きという理由から、先頭に立って将棋大会をつくりあげていった。なにか見返りを期待していたり、恩を売ったりということは全くなく、将棋が好きであるということだけで、ここまで行動しているのだ。

Aa という人物がいなければ本将棋大会はここまで盛り上がりを見せていない。Aa という人物がいたからこ

そ、将棋大会は活気づいたのだ。本将棋大会に一番関わっていたのは Aa であったと言える。

6-2 その場にいるひとりひとりの重要性

青空将棋でははっきり決めているわけではなくても、それぞれに役割があった。そして本将棋大会も色々な人がいてそれぞれひとりひとりの存在が重要であった。「様子を見に来る人」として紹介した Eb は棋力が高く、Eb の存在は将棋大会におけるヒーローのようなものであった。そのため Eb と対局できることを喜ぶ参加者も多かった。

また最年少の参加者 Ba の存在は、将棋大会に活気をもたらした。そしてその Ba の保護者の「ちょっと指せる人はいますか?」という発言は、Ba の対局相手に Ba との棋力の差があまりない人を求めていると言える。S 将棋クラブの席主である Km が「強い人と対局したいという人もいれば、弱い人と対局したいという人もいる」といっていたが、それはその通りで、本将棋大会に棋力が高い人と低い人の両方が存在していたことで、参加者は楽しめたのではないかと思う。

さらに将棋大会の参加者が固定化されてしまうと、お互い知っていて気楽に指せるといういい面もあるが、飽きてしまう。そのため初めて、あるいはときどき将棋大会に参加する人の存在は大事であった。今までに對局したことのない人とのやりとりは新鮮なものとなり、対局者に緊張と期待の両方をもたらした。

6-3 状況によって生じる場は異なる

そして参加者だけではなく、市場の人や観戦者、参加料を払わずに将棋大会に参加する人達もこの場をつくっていた。本論文では「将棋大会開催時」を中心とし、将棋大会開催時以外の「大學堂営業時」さらに「大學堂閉店時」の事例も述べたが、どれも大學堂や大學堂周辺の将棋が指されている場である。同じ場であるのだが、状況によってそれぞれの場の特徴も、集まっている人達も違う。集まっている人達が違うといっても

はっきりと分かれているわけではなく、大學堂閉店時に将棋を指している Ca や Cb は、将棋大会にも関わっていた。大學堂開店時に将棋を指す市場の人も、将棋大会は覗きにきて参加していた。そして Aa はこれら 3 つの場全てに関わり、どの場の人達とも関係をつくっていた。

6-4 その場にいる人が場をつくる

筆者は最初運営者である自分が色々仕掛け、場をつくらうとしていた。決まりをつくり、道具を揃え、イベントらしさをだすため景品の用意をした。しかし参加者はそれらを重視しているわけではなかった。参加者は遊びにきており、参加すること自体を楽しんでいる。参加者にとって必要なのは備品や景品ではなく、一緒に将棋を指す相手、遊び相手であった。相手がいないと将棋が指せないし、対局は楽しく行いたい。その想いが場を形成したのだ。このように場に関わる人達自身で場を作るというのは、青空将棋と共通する特徴であった。

青空将棋では将棋指し自身が、将棋を指す場を作り上げていた。そして本将棋大会も青空将棋のように、参加者が作り上げていく形になった。机や椅子が足りなくて将棋が指せないというときは、Aa を含む参加者がビールケースなどを机にし、また将棋が指せそうな場を見つけて、対局を行っていた。これらは参加者が考え、行動に移している。

また青空将棋では、トラブルを起こして困るのは将棋を指す自分達であるということから、トラブルは小さなことから解決している。そして本将棋大会でも、トラブルは参加者によって解決されている。駒置きがないことからトラブルが起きて口論になってしまったが、だからといって両者とも将棋大会に来なくなるということとはなかった。それから、将棋大会に来て将棋を楽しみ、しかし持ち駒のトラブルは起こらないように気を付けている様子がみられた。何か問題が起こると、困るのは将棋を指す自分達である。そのため困った状況は、自分

達で改善していった。トラブルが起こったときに筆者が口出し、決まりを作ってトラブルを解決するという行動は適切ではない。当事者たちのやり取りで関係は修復されていく。

青空将棋ではほぼ決まりが無く、決まりがあったとしてもそこで将棋を指している人達によって決められた決まりである。一方将棋クラブでは運営者によって決まりが決められており、守らないといけな。筆者は最初、運営者の立場のつもりであったため、将棋大会における決まりを作った。決まりについて、ここは皆でつくる場だから、参加者の意見を聞きながら決まりを作った方がよい、ということまで考えていなかった。そのため参加者から決まりに関する意見を伝えられたとき、正直驚いた。そして本将棋大会は、筆者がひとりで作るものではないということに気付かされた。参加者のアイデアによって決まりは改善され、本将棋大会はよりよくなった。

また、受付で名前を書かないという参加者がいたとき、確かに青空将棋のことを考えてみれば、お互いの名前を知らないことは普通であるし、本将棋大会に参加するにあたって名前は必ずしも必要ではなかった。名前を明かしたくないという人がいること、名前を書かなくても参加できるようにすればさらに参加者の幅が広がること、そういったことを筆者は、参加者の行動から教えてもらった。

本将棋大会は勝ち負けよりも遊びに来ている、楽しみに来ているという人が多いように感じられる。例えば Bb は、「真剣に遊んでいる」といった感じであり、また Jb の発言からも、Bb は遊びに、楽しみにここに来ている、と考えられる。Bd はたくさん対局をする人であるが、対局自体だけでなく、対局者達とのやりとりも楽しんでいる。Beも、時折話をしながら楽しそうに指しているし、楽しくしようとしている。

このように、参加者達のやりとりによって場は作られている。参加者達は皆、好きでこの場に来ている。楽しくなければこの場に来ないであろう。そのためここを楽

しい場にしようという気持ちを持っており、その想いは対局中の発言やその他の行動に現れている。

6-5 都市における場の形成

本将棋大会は北九州市という都市で行った。都市では道を歩けばたくさん知らない人とすれ違う。そしてお互いのことを知らなくても生活に困らない。そのような都市で、知らない人同士が集う場というのはどうすればくれるのであろうか。

将棋が人を引き寄せる特徴を持つことや Aa の存在がきっかけで、縁台将棋大会は始まった。この場は Aa を中心とした、その場に集まる人々によって作りあげられていった。人々は状況によって振舞いを変え、複雑な関係性をつくり、そしてその場を楽しいものにしていった。困った時は自分達で状況を改善し、そして現状がさらに良くなるように行動していた。

場は事前に用意された設備やシステムではなく、実際にその場で過ごしている人達との関係性が作りあげていく。今その場に、自分の目の前にいる、その人とのやり取りそのものが、なによりも重要である。

おわりに

大阪で青空将棋が至る所で行なわれているのを見たとき、なぜこんなにも人が集まっているのだろう、この場はどうやって成り立っているのだろうと思った。そしてそこでははっきりとはしていなくても、ひとりひとりの役割のようなものがあり、決まりも自分達で決めていた。

そして本縁台将棋大会も青空将棋のようなものになり、たくさんの人々の複雑な関係性により場が作られていった。これからもここで楽しく将棋を指していくために、この場をよりよくしようとそこにいる人達は考えていた。筆者もこの場で将棋を指すひとりとして、この場にいる人達と関わりができたことを嬉しく思う。ここにいることが楽しい、ここにいたいという気持ちが自然と場を形成していた。

謝辞

本稿を作成するにあたり、たくさんの方々にお世話になりました。大學堂や大阪、天童との出会いをもたらしてくれ、たくさんアドバイスをいただいた竹川大介教授、縁台将棋大会の重要人物であった宮本義也さん、縁台将棋大会参加者のみなさん、筆者に将棋の指導をしてくださる小倉将棋センターの三浦重頼さん、大阪で1週間朝から晩まで将棋を指す場を案内

してくれた旅人、大阪で出会ったたくさんの将棋指しのみなさん、天童の盤駒販売関係者のみなさん、「将棋の日」の収録に誘って頂いた市役所のみなさん、そして、論文執筆のサポートをくださったみなさん。心より感謝しております。これからもよろしく願います。

参考・引用文献一欄

嶋崎信房 1995『いまだ投了せず 将棋に命を賭けた男たち』株式会社朝日ソノラマ

竹川大介 2009『大學堂と市場劇場』69 大學堂運営実行委員会

花村元司 2012『鬼の花村・将棋指南』公益社団法人日本将棋連盟

原口剛 2005『現代思想』青土社

本多啓 2005『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』56-57、財団法人東京大学出版会

脇本泰子 2013『東瀬戸内をつなぐ経済情報誌 MONTHLY RELORT』財団法人岡山経済研究所

北九州市 <http://www.city.kitakyushu.lg.jp/index.html> (2014/1/15 アクセス)

旦過市場 http://tangaichiba.jp/modules/about_tanga/ (2014/1/15 アクセス)